

# GLOBAL DIALOGUE

2.3

グローバル・ダイアログ：国際社会学会ニュースレター  
第2巻 第5号 (2012年2月号)

## “Watching” Tahrir

タハリール広場からエジプト革命を「観察する」

Samia Mehrez  
サミア・メレス

## ISA Forum in Buenos Aires

ISAフォーラムinブエノスアイレスの挑戦

Alberto Bialakowsky and  
Alicia Palermo  
アルベルト・ビアラコフスキー  
アリシア・パレルモ

## Polish Migrants

ポーランド系移民

Ewa Palenga-Möllenbeck  
エヴァ・パエンガーメレンベック

## The Debate Continues

不平等世界における社会学：討論のつづき

Jeffrey C. Alexander  
Paulo Henrique Martins  
ジェフリー・アレクサンダー  
パウロ・エンリケ・マーティンス

### > The Lamentable State of Post-Soviet Sociology

ポスト・ソビエト社会学の嘆かわしい現状

### > Maori Sociology in New Zealand

ニュージーランドにおけるマオリ社会学

### > Poverty in Post-Soviet Armenia

ソビエト連邦後のアルメニアにおける「新しい貧困」について

### > History of Current Sociology

ヒストリー・コーナー：Current Sociology誌の活力

### > Our Japanese Editors

編集者紹介：日本語翻訳チーム

### > The Global Classroom

社会学を教える：グローバル・クラスルーム

### > Electoral Bias in the ISA

ISAの選出方式におけるバイアスについて

### > In Memoriam: John Rex and Kurt Jonassohn

追憶：John RexとKurt Jonassohn

### > Sociologies from around the world: Colombia, Turkic Countries, India, and BRIC countries

世界各地の社会学：コロンビア・トルコ諸国・BRICs諸国

NEWSLETTER



International  
Sociological  
Association



VOLUME 2 / ISSUE 3 / FEBRUARY 2012

GDN



## > Editorial 編集部より

### Social Justice and Democratization 社会正義と民主化

ブ

エノス・アイレスは、「社会正義と民主化」というテーマを掲げた今回のISA Forumにとりわけ適した場である。フォーラム開催現地委員会の代表と副代表であるAlberto Bialakowskyと Alicia Palermo、そしてALAS (ラテン・アメリカ社会学会) 会長のHenrique Martinsが本号に寄稿している。ラテン・アメリカは、社会正義と民主化にむけた革新的な運動を培ってきただけでなく、その出身である社会学者たちがそれらの運動における英雄的立場にあった。そこで彼らは、ISA Forumでも紹介されるであろう、その動的で地域特有の社会学を生成したのである。

「社会正義と民主化」というテーマは単にその場所であるからだけではなく、この歴史的瞬間としても適切である。Samia Mehrezhaは本号の巻頭にて、エジプトの「一月革命」記念を回顧しており、エジプト国内や国外に広がるその多重的な意味を思索している。カイロのタハリール広場での事件は、真に、一年に渡った、社会正義と民主化を掲げたグローバルな社会運動の波を鼓舞するものであった。一見どこからでもなく、運動は怯まず臆せず、チュニジア、エジプト、リビア、シリア、イエメンの独裁政権に立ち向かい、財政引き締めに対する欧州の運動が発火し、ウォール・ストリート占拠事件へと集束したものが合衆国全土に広がり、世界中を駆け巡ったのである。イスラエルやチリ、そして最近ではロシアにおける大規模な抵抗を我々は忘れるべきではない。その不平はナショナルなものであっても、それに対する運動はグローバルなものである。

搾取された者が運動に参加したとはいえ、彼らの主導による運動はそれほどなかったが、持たざる者——彼らの存在は予測可能性または保証のない存在として定義される——による運動は数多くあった。学生もしくは以前は学生の身分にあったもの、より広く言えば、若者による運動があったが、彼らは未来、そして自分たちが持つ技術や知識を活用する機会を持っていなかった。また、土地や水を所有していない農民による運動が——中国、インド、フィリピン、ブラジル、ボリビア、そしてあらゆる場所で——展開された。占拠運動は都市の囲い込みに対するものとして起こり、公共の場をめぐる警察と争った。

占拠運動が資本主義に対する象徴的な挑戦となった一方で、それらはまさに社会学に対する挑戦を示すことにもなる。不平等に関する研究は、もはや99%へ限ることはできず、その1%に深く着目すべきである。我々は自身が収入を得ることを制限することはできないが、富や、先の1%がどのように99%を搾取しているのか、例えば債務奴隷の様々な形態を通じて行っているのかなど、研究すべきである。政治社会学は、社会不正義に立ち向かえないし、金融資本を規制できない選挙民主主義への焦点化を超えようとしている。占拠運動は自らを参加型民主主義と定義している。ここでもラテン・アメリカが先駆者となっている。1990年代に経済を崩壊させた構造的な適応政策が、アルゼンチン人による工場や公共空間の占拠運動に留まらない10年にわたる抵抗運動を招いた。これが、今回のISA Forumが8月1-4日に渡ってブエノス・アイレスで開催される理由でもある。(芝真里訳)

グローバル・ダイアログは年間5回、13か国語によって発行されています。FacebookやISAのホームページからもご覧いただけます。寄稿については、Michael Burawoy: [burawoy@berkeley.edu](mailto:burawoy@berkeley.edu)までお知らせください。



“Watching” Tahrir. The Egyptian January 25th “Revolution” signaled a new era of social protest. The anniversary is the occasion for Samia Mehrez to think through its multiple meanings, to different publics both in Egypt and beyond.



Challenges of the ISA Forum in Buenos Aires. Local organizers, Alberto Bialakowsky and Alicia Palermo, tell us of their plans for a global conversation about Social Justice and Democratization in Buenos Aires.



Polish Migrants. The break-up of the Soviet Union and its Empire released a flow of migrants across Eastern and Central Europe, reflecting the uneven development of the area. Ewa Palenga-Möllenbeck offers a poignant analysis of Polish migrants to Germany.



Local Cosmopolitanism. Continuing the debate about international sociology, Jeffrey Alexander shows how the local and the cosmopolitan are inextricably interwoven.

# > Editorial

## Board

### 編集委員会

編集長:

Michael Burawoy.

編集主任:

Lola Busuttil, August Bagà.

本部編集委員:

Margaret Abraham, Tina Uys, Raquel Sosa,  
Jennifer Platt, Robert Van Krieken.

顧問編集委員:

Izabela Barlinska, Louis Chauvel, Dilek Cindoglu,  
Tom Dwyer, Jan Fritz, Sari Hanafi, Jaime Jiménez,  
Habibul Khondker, Simon Mapadimeng, Ishwar Modi,  
Nikita Pokrovsky, Emma Porio, Yoshimichi Sato,  
Vineeta Sinha, Benjamin Tejerina, Chin-Chun Yi,  
Elena Zdravomyslova.

地域編集委員

アラブ諸国:

Sari Hanafi, Mounir Saidani.

ブラジル:

Gustavo Taniguti, Juliana Tonche, Pedro Mancini,  
Fabio Silva Tsunoda, Dmitri Cerboncini Fernandes,  
Andreza Galli, Renata Barreto Pretulan.

コロンビア:

María José Álvarez Rivadulla, Sebastián  
Villamizar Santamaría, Andrés Castro Araújo.

インド:

Ishwar Modi, Rajiv Gupta, Rashmi Jain, Uday Singh.

イラン:

Reyhaneh Javadi, Shahradsht, Shahvand,  
Fateme Moghaddasi, Saghar Bozorgi, Jalal Karimian.

日本:

西原和久(日本語版翻訳監修)、芝真里(日本語版編集  
事務局幹事)、塩谷芳也、姫野宏輔、高見具広、岩館豊、  
池田和弘、福田雄、三部倫子、佐藤崇子

ポーランド:

Mikołaj Mierzejewski, Anna Piekutowska,  
Karolina Mikołajewska, Jakub Rozenbaum,  
Tomasz Piątek, Michał Chełmiński.

ロシア:

Elena Zdravomyslova, Elena Nikofova,  
Asja Voronkova.

台湾:

Jing-Mao Ho.

ウクライナ:

Svitlana Khutka.

メディア・コンサルタント:

Annie Lin, José Reguera.

# > In This Issue 目次

Editorial – Social Justice and Democratization 編集部より：社会正義と民主化 2

## > TRANSNATIONAL TRANSLATIONS

トランスナショナルな文脈でのトランスレーション(翻訳)

“Watching” Tahrir タハリール広場からエジプト革命を「観察する」  
by Samia Mehrez, Egypt サミア・メレス(エジプト) 4

Challenges of the ISA Forum in Buenos Aires

ISAフォーラムinブエノスアイレスの挑戦

by Alberto L. Bialakowsky and Alicia I. Palermo, Argentina

アルベルト・L・ビアラコフスキー、アリシア・I・パレルモ(アルゼンチン) 6

Polish Migrants ポーランド系移民

by Ewa Palenga-Möllnbeck, Germany エヴァ・パェンゲーメレンベック 8

## > SOCIOLOGY IN AN UNEQUAL WORLD:

THE DEBATE CONTINUES 不平等世界における社会学: 討論のつづき

Local Cosmopolitanism ローカル・コスモポリタニズム

by Jeffrey C. Alexander, USA ジェフリー・アレクサンダー(アメリカ) 10

Latin America – A Community of Destiny? ラテン・アメリカ: 運命共同体なのか?

by Paulo Henrique Martins, Brazil パウロ・エンリケ・マーティンス(ブラジル) 12

## > FROM THE REGIONS 各地域より

The Lamentable State of Post-Soviet Sociology

ポスト・ソビエト社会学の嘆かわしい現状

by Victor Vakhshayn, Russia ビクター・ヴァクシュタイン(ロシア) 14

Maori Sociology in New Zealand ニュージーランドにおけるマオリ社会学

by Tracey McIntosh, New Zealand トレーシー・マッキントッシュ(ニュージーランド) 16

A Note on the “New Poverty” in Post-Soviet Armenia

ソビエト連邦後のアルメニアにおける「新しい貧困」について

by Gevorg Poghosyan, Armenia ゲボーク・ポゴシアン(アルメニア) 17

## > SPECIAL COLUMNS 特別寄稿

History Corner: The Vital Life of Current Sociology

ヒストリー・コーナー: Current Sociology誌の活力

by Jennifer Platt, UK, and Eloísa Martín, Brazil

ジェニファー・プラット(英国)、エロイーザ・マルティン(ブラジル) 18

Teaching Sociology: The Global Classroom 社会学を教える: グローバル・クラスルーム

by Larissa Titarenko, Belarus, and Craig B. Little, USA

ラリッサ・チタレンコ、クレイグ・B・リトル(米国) 20

ISA Politics: Bias Against National Associations

各国全国学会(National Associations)に対するバイアスについて: ISAの選出方式変更の  
必要性

by Roberto Cipriani, Italy ロベルト・シプリアーニ(イタリア) 22

Introducing the Editors: The Japanese Team 編集者紹介: 日本語翻訳チーム 23

## > IN MEMORIAM 追憶

John Rex dies at 86 訃報 John Rex(享年86)

by Sally Tomlinson and Robert Moore, UK 24

Kurt Jonassohn, 1920-2011 訃報 Kurt Jonassohn (1920-2011)

by Céline Saint-Pierre, Canada セイリーヌ・サンーピエール(カナダ) 25

## > CONFERENCES 学会

Heritage and Rupture in Colombian Sociology

コロンビア社会学における遺産と断絶

by Patricia Jaramillo Guerra with Fernando Cubides, Colombia

パトリシア・ジェラミロ・グエラ、フェルナンド・キュービデス(コロンビア) 26

Turkic Sociology in a Eurasian Space ユーラシア空間におけるトルコ社会学

by Elena Zdravomyslova, Russia エレーナ・ドヴォミスローヴァ(ロシア) 28

The Indian Sociological Society's Diamond Jubilee インド社会学学会60周年記念大会

by T. K. Oommen, India T.K.オーメン(インド) 30

Social Stratification in the BRIC Countries BRICs諸国における社会階層

by Tom Dwyer, Brazil トム・ドワイヤー(ブラジル) 32



# > “Watching” Tahrir

## タハリール広場からエジプト革命を「観察する」

by Samia Mehrez, American University in Cairo, Egypt サミア・メレス(カイロ・アメリカン大学:エジプト)

サミア・メレスは、AUC(カイロ・アメリカン大学)のアラブ・イスラム文明学部アラビア文学科の優秀な教授であり、翻訳研究センターの長でもある人物です。私は最近、カイロで彼女と会った際に、彼女から近日刊行予定の著作『Translating Egypt's Revolution』の内容を見せてもらいました。それは、彼女が学生と共に著述した、タハリール広場からのエキサイティングな物語でした。そこで私は彼女に、Global Dialogueにこの記事を書いてもらうよう頼んだのです。(以上、マイケル・ブラウホイISA会長)



この記事が掲載されるのは、2011年1月25日に始まり、同年2月11日にホスニ・ムバラク前大統領を追放したエジプト革命から、ちょうど1年が経過した頃のことでしょう。革命は様々な複雑な方法で、エジプトの未来と、地域と世界の双方に占めるエジプトの位置づけを描きなおすことになりそうです。過去数ヶ月間にわたって、1月の——現在もなお、thawra(革命)とinqilab(クーデター)の間で揺れ動いている物語が増殖中の——革命は、少なくともエジプト人に関する限り、ひとまとめに名付けられたり、枠をはめられたりすることに抵抗し、逆らい続けています。とはいえ、ひとつのことは確かです。それは、2011年1月25日から始まるタハリール広場での伝

説的な18日間は、(激しい衝突や大規模なデモ、継続的な座り込み活動などの連鎖は言うまでもなく)現在進行中のエジプト革命の象徴となる、様々な重要な意味でエジプト人を変え続けている全国的な革命のためのバロメーターそのものになったMidan al-Tahrir (タハリール広場)の、新たな歴史的・象徴的時代のはじまりを告げるものでした。

1月25日以後しばらくの間、人々はタハリール広場が、迫害された何百人の人々や負傷して抑留されている数千人の人々の光景を単に展示するだけの場になってしまうのではないかと不安がっていました。私の同僚であるAmr Shalakanyも、そのようなことが起こるのを恐れていたので、タ

A large banner in Tahrir Square, marking the anniversary of the January 25 Revolution, calling for the hanging of Gen. Hussein Tantawi (left), former President Hosni Mubarak (center) and former interior minister Habib al-Adly. Under the nooses is written: "The Rule of the People." Photo by Mona Abaza.

>>



Samira Ibrahim shows the victory sign during a December rally supporting women's rights in Cairo, after she had successfully sued the military for forced virginity testing of women detainees.

ハリール広場を「訪れたり、革命を『観察』したり、軽く一瞥したり、部分的に革命の雰囲気を感じたりすることができて、別の時間帯には帰宅することもできる場所」にしたのです。この目論見は成功し、人々はタハリール広場に「革命を観察」しに来たうえに、さらに多くの人々が自宅で、テレビやソーシャルメディアで「革命を観察」し続けたということになったのです。しかし、このまさしく「観察」しているプロセスによって、多くの人々は活発な参加者として刷り込まれ、その「観察」（つまり革命の「光景」）を、新しい目的を生み出す革命的な主体へと変えていったのです。

この文脈における「光景」は、革命の動員と激化にとって、政治活動よりも適した方法になりました。実際、エジプト革命の「光景」と連鎖は、にぎにぎしく激しいものでした。あらゆる出来事が強力に文書化され、広められ、回覧されていきました。それらは劇的なもので、おそらく恒久的なインパクトを持つものでしょう。エジプト人は、空間（公的／私的、リアル／ヴァーチャルの双方の空間）との新しい関係性を編み出しました。エジプト人は、身体の所有権に関する新発見の力を身につけ、口頭または書面のどちらにせよ、言語に関する権利を行使することを決心したのです。

エジプトでは過去30年間にわたって、ムバラク政権（その体制の大部分は、ポスト2011年1月のエジプトでも、支配的な暫定軍事政権によって再生産され続けているのですが）によって、公共の空間、公共の政治、公共の文化の統制が行われてきました。抑留と拷問を正統化し続ける緊急法律の施行と、不定期的ではあるが表現の自由に対する厳しい検閲を

通して、ムバラク政権の統制は実行されてきました。しかし、これは公共の場の占有と集団での抗議行動の動員を通じての、進行中の抵抗活動を止めることができませんでした。

エジプト革命の複数の「光景」は、旧体制の恐怖政治に対して劇的な決裂を印づけました。それらは、新しく獲得した自由と空間、身体、言語の所有権を守るエジプト人たちの、恐れを知らない時代の始まりを可能にしたのです。そしてさらに、政治的に創造性のある無数の人々を通して、記号論、美学、詩学などが、世界中に同様の革命を促しました。これらの「光景」——その最後のものは、タハリールで大晦日に行われた、midanの歴史で初めてとなるもの——は、エジプト人を急進的にし、地に足のついた、継続的な集団動員を促進することに役立ちました。革命のエネルギーを使い果たさせ、恐怖政治によって再びエジプト人を統制下に置こうとする暫定軍事政権や、その仲間たち、ムスリム同胞団、スンニ派の過激組織などによる継続的な反革命的な試みによって、多大な資金と人命が犠牲になっているにもかかわらず、この動員は続きます。これらの革命的な「光景」は、ムバラク前大統領とSCAF（軍の最高評議会）の「支持者」によって昨年行われた「反革命的な光景」が、脚色された短命なものであることを明らかにし、革命勢力の力と、反革命勢力の欺瞞を証明したのです。

まず、エジプト革命の「光景」は、伝統的なmulidの儀式——階級による差を超えて、全てのエジプト人にとってなじみ深い「預言者聖誕祭」の儀式——を利用して、エジプト人を急進的にし、革命をもたらしました。「預言者聖誕祭」は、今年のタハリール

ル広場でのデモンストレーションの不可欠な部分になりました。この儀式の祝賀の様子は「独立タハリール共和国」の誕生を支持し、その光景そのものが街路に何百万人ものエジプト人を動員し、全エジプト的に同様の現在進行中のデモンストレーションを行うことを求め続けました。タハリール広場の革命を「観察」することの最も重要な結果の1つは、タハリール（この語は「解放」を意味します）がただの空間的な場所ではなく、集合状況意識であるという基本的な理解が、エジプト革命——'ish, Huriya, 'adala igtima'iya（パン、自由、社会的正義）が、意義と翻訳を必要とし続ける初発の動機であったと言えるでしょう。SCAFの暴力と、見えづらい不法行為や脅迫（暴力による証言の強要、感電、デモ参加者の抑留、拘留された女性デモ参加者に対する処女検査、一般人に対する軍事裁判、装甲車両を用いての何十人ものコプト人デモ参加者の殺害、メディアやNGOへの襲撃、外国人レポーターへの嫌がらせ、選挙投票の不正、女性への性的暴行）などの「光景」が繰り返される様子は、昨年2月以降、ソーシャルメディアと個人的な衛星チャンネルを通じて、閲覧され続けました。

暴力沙汰の絶えないエピソードは、軍と人々の間で当初築かれていた蜜月関係をもぎとり、信用を失わせました。しかし、革命がエジプトと周辺地域だけで続いているわけではなく、少なくともタハリール広場の「光景」の重要性が、多方面で国際翻訳され続けるということ、ますます多くのエジプト人は知るようになっていきます。そして、言語の違いを超えて、タハリール広場の光景は反響を続けていくでしょう。「人々は、旧体制(al-sha'b yurid isqat al-nidham)の打破を求めている」と。(姫野宏輔訳) ■

# > Challenges of the ISA Forum in Buenos Aires:

## Fighting an Unequal World with an Equal Sociology

### ISAフォーラムinブエノスアイレスの挑戦

—平等の社会学Equal Sociologyによる不平等な世界への闘い—

by Alberto L. Bialakowsky and Alicia I. Palermo, President and Co-President of the Local Organizing Committee,  
ISA Forum, Buenos Aires, Argentina, 2012  
アルベルト・L・ビアラコフスキー (ISAフォーラム2012地域開催委員長)、アリシア・I・パレルモ (同共同委員長)

2012年8月1日から4日にかけてブエノスアイレスで開催される、ISAフォーラムの準備が目下進められている。ブエノスアイレスを開催地として選ぶことで始まったこの準備過程は、来たるフォーラムとこのアルゼンチンの都市とを、社会学と社会科学におけるグローバルかつ知的な交流がもっとも集中する現場にしている。このフォーラムは、この数十年においてラテンアメリカではグローバルな視野をもった最も意義ある会合である。疑いもなく、とくに文学においては、ラテンアメリカの知的なポテンシャルはよく知られている。しかし、そのポテンシャルが、自身の批判的で集合的かつ変革的な役割を認識するためには、まだのぼるべきステップがいくつもある。このフォーラムは、北と南、南と北といった大陸間を架橋した対話と、私たちに勇気づける科学的・社会的挑戦へと向かうための大きな機会として位置づけられている。

私たちは、このフォーラムがもつ3つの位相を強調したいと思う。1つ目は、会議のテーマである「社会的正義と民主化」である。2つ目は、科学的知

識の生産と社会変容における「主体」の役割だ。そして3つ目として、フォーラムそれ自体の知的構造であり、それは見過ごされがちだが、この会議に実質をもたらすものである。

1点目に関して、テーマを設定し報告を募集するという事は、つねに専門性と下位領域が問われるが、しかしそれらを横断する問いをも含んでいなければならない。複合性のパラダイムは、多様な視点による探究を促進し、ミクロとマクロや専門領域と学際領域といった二項対立を乗り越えることを可能にしている。この意味で、複数のレベルと異なる角度から、各レベルを豊かにした互いに交流することを試みる事が可能である。それゆえ「社会的正義と民主化」は、特殊で具体的な下位領域に現れ、複数の意味をもちながら下位領域相互を超越するのである。

社会学の歴史は、正義と不平等に関する評価に満ち満ちている。ある理論的立場は、現状に対して同情的であり、他方の異なる立場はより批判的な視点をとり、社会変動をうながす。

しかしながら、権力を社会学の中心に置くことで、これらの対立の間にある距離は減少する。言い換えれば、すべての社会学は、ある種のユートピアと生政治の実践とを含み、これらが調査研究を動機づけ、理論的基礎や応用・分析さらには知識の移転に暗黙のうちに浸透している。

現代のグローバル社会においては、システム危機の痛苦によって、各社会内部と各社会間での社会的正義へと向かう新たな知的努力が必要とされる。人権についてのグローバルな議論の再出現は、一方での科学および生産力における顕著な進歩と他方での社会的平等でのインパクトとの間の矛盾、われわれの自然との関係性と地球的動態の理解との間の矛盾を前面化させている。これら対立する諸力をコントロールし、その繊細なバランスを保持しようとする努力は、実証主義の優越性と啓蒙的アプローチとを疑問に付す一つの言説——フランクフルト学派による議論や、より近年ではラテンアメリカにおける「批判的脱植民地的思考critical and decolonial thinking」の伝統——を生

み出している。科学の進歩は社会的正義や市民の参加を保障するものではない。比喩的に言えば、社会の地殻プレートは、隷属と貧困、エスニック的またはジェンダー的な隔離、大量虐殺、そして生態系の破壊が持続していることを示している。

民主化は各社会のレベルだけで作動するのではなく、社会の間、社会と自然との間、さらには学問領域間で作動することは疑いえない。しかし、自民族中心主義、人間中心主義、さらには複数のヘゲモニーが、社会研究の遂行だけでなく、社会学的な理解と発見の科学的プロセスのまさにその内部においても、諸課題を提起している。「ラテンアメリカの新従属学派によって提起されたラディカルな認識的批判」を参照しながら、スジャータ・パテル (2001) は以下のように記す。「アニバル・キハーノ、エンリケ・デュッセル、ワルター・ミニョロといった理論家たちは、この立場を発展させ、次のように論じた。すなわち、社会学理論に固有の普遍化とは、知の地政学の一部である。このプロセスの鍵となるのは近代化の評価と近代化と社会理論との関係性である」。

言い換えると、このことは異なる研究主題における客観的な問いを分析するという問題ではなく、認識論的な非対称性とヘゲモニー的な理論化についての争点を提起しているのである。新たな理論的潮流の対話的アプローチは、近代性のパラダイム、に根ざしている非対称性の固定性を否定し、これらの対立は超えることが可能である理念から出発する。この経験は、アフリカの研究者たちによって強調されている。「ナイジェリアにおいて社会学するということは、いくつもの挑戦的な節目を過ぎてきた。近年のナイジェリア、さらにはアフリカの社会学者たちの最も切迫した課題は、現出する社会構造における逆説と緊張の性格を把握する内発的なモデルによって、アフリカの社会的現実だけでなく、このプロセスによって生み出された行為主体の特徴を説明し解釈する批判的な力を向上させることである。その達成のために、私たちはパラダイムシフトを必要としている」(Onyeonuru 2010: 280)。

いずれにせよ、こうした思考の形態は、新しい「知の生態学」(De Sousa Santos 2010)を確立するためには、

## “the most significant such meeting in Latin America in decades”

このフォーラムは、この数十年においてラテンアメリカでは最も意義ある会合である。

科学の変化に対応した新たな対話的なパラダイムが必要であることを現しているだと、私たちは信じている。引き続き危機のもと、社会学者たちは変化のための批判と提案を提供することができ、そのためには大陸を超えた理解が不可欠なのである。しかしながら、このことは内発的な思考が不要であるということの意味しているのでもなく、また地球という地平での議論を希求することをやめることを意味しているのでもない。

社会的不平等の背景とつねに動いている世界に対して、社会学者たちはリアリティとその変容を説明し理解することで多くを貢献しなければならない。グローバル危機は、広大で多様な文脈のもとで、広くかつ多様な社会の諸部分へとますます影響を及ぼしている。私たちは、グローバル・サウスおよびグローバル・ノースにおいて、現在および将来に影響を被る集団のより多元的な闘争とより表出的な表現に対して支援を提供し得るのである。

このことは、私たちに以下の問いへと導く。ISAフォーラム2012は、これらの課題に応えられるだろうか。疑いなく、独自の構造のゆえに、応えることは可能である。じっさい、このフォーラムは、対話の道具となり、ともに思考するための空間となることで、これらの議論を深めることを目指している。社会的および知的な力として、そしてシンポジウムおよび出会いの場とし

て、創造的な交流を通じて、グローバル社会分析を先進させる可能性を有している。事実、批判的でリフレクシブなコミュニティが形成され、それによって、一般的知性の役目として、集合的で公共的な知性が形成されるのである。

私たちは、熱心で友愛的な場面のための戦いにコミットしている。私たちの願いは、共同かつ共有のな私たちで、研究部会や作業・テーマ部会、ジョイントセッションさらにはプレナリー・フォーラムとパブリック・フォーラムの内部とその間での、議論と互いの交流との組み合わせを実践することである。(岩館豊訳) ■

### References

De Sousa Santos, B. (2010) Para descolonizar Occidente. Más allá del pensamiento abismal. Buenos Aires: CLACSO-Prometeo-UBA.

Onyeonuru, I. P. (2010) "Challenges of Doing Sociology in a Globalizing South: Between Indigenization and Emergent Structures" Pp.268-281 in Michael Burawoy, Chang Mau-kuei, and Michelle Fei-yu Hsieh (eds.) Facing an Unequal World: Challenges for a Global Sociology (Volume I). Institute of Sociology, Academia Sinica, Taiwan, and Council of National Associations of the International Sociological Association.

Patel, S. (2010) "The Imperative and the Challenge of Diversity: Reconstructing Sociological Traditions in an Unequal World" Pp.48-60 in Michael Burawoy, Chang Mau-kuei, and Michelle Fei-yu Hsieh (eds.) Facing an Unequal World: Challenges for a Global Sociology (Volume I). Institute of Sociology, Academia Sinica, Taiwan, and Council of National Associations of the International Sociological Association.

# > Polish Migrants: Resourceful Transnationals or Guest Workers? ポーランド系移民

—資源ある越国家的な移民なのか、それとも外国人短期労働者なのか—

by Ewa Palenga-Möllnbeck, University of Frankfurt, Germany  
エヴァ・パェンガーメレンベック (University of Frankfurt, ドイツ)



1 900年代から移民研究では新たな研究方法が支持されてきている。その古典的なパラダイムでは、移住は最終的に受け入れ社会への同化にいたる、あるいは完全な帰国にいたる、一生に一度きりのこととみなされていた。だが、「トランスナショナル」な移住に関する研究は、いかにして移民は二つ以上のナショナルな社会と紐帯を維持できるのかに注視する。こうした研究方法は北米の経験に基づいて進められたが、同様の現象はヨーロッパにも見出せる。その一例は、シレジア高地(Upper Silesia)出自の短期出稼ぎ移民である。そこは現在ポーランドとされているが、第二次世界大戦前は国家政策を突っぱねることも珍しくなかった、ポーランドともドイツともつかないボーダーランドであった。

ドイツ市民権法が血統主義原則を基盤とするため、この地域の多数の住民はドイツとの社会的・文化的な紐帯の有無を問わず、ドイツ市民権を付与されている。しかもポーランド国籍を放棄する必要もない。二重市民は1990年代からこの抜け道をドイツ労働市場に参入する手段を得るうえで利用してきた。というのも、ドイツ労働市場は2011年までポーランド人市民に対して閉ざされたままだったからだ。少なからずドイツに永住する人もいる一方で、何十万ものシレジア人たちはポーランドの永住権を保持しつつドイツに通勤することを選びとっている。こうすれば、ポーランドの労働市場を当てにした稼ぎ以上に、よい生活水準を得ることができるのである。

シレジア系二重市民の事例は、法

>>

Upper Silesia's close association with Germany has a long and well-remembered history. In this post-WWI drawing, Upper Silesia is depicted as torn between Poland (represented by poverty of woman with baby) and Germany (represented by the prosperity of factory and country houses). To this day many inhabitants feel caught between both worlds. Original drawing held in the Imperial War Museum, London, UK.

的な特権があれば自動的に「トランスナショナル」となるわけではないことを示している。かれらの大部分は移動生活様式に由来から慣れているが、だからと言って「二つの社会に二股をかける人たち」という狭義のトランスナショナルな移民であるわけではない。生涯移住したままでありつつも自分の出身国社会のみと社会的紐帯を保持するような、これとは異なる移民の類型も珍しくないのを考えてみるとよい。これは少し驚くべきことである。つまり、そういった移民は一見して文化的な遺産（バイリンガル主義、伝統としての移民など）、法的な特権（二重市民権）、決定的な点として移民関連産業における雇用（トランスナショナルな運営をする企業やサービス提供者など）によってトランスナショナルな移民になるものと期待されているのかもしれない。

しかしながら現実はもっと複雑である。ある面では、こうした移民は二重市民であることで選べないほど多くの雇用機会に恵まれている。ポーランドから年金、終身雇用の仕事、職業訓練を得ながら、ドイツで正規雇用ないしパートタイムで働いていることもある。こうすることで、かれらはドイツに「同化した」非移民という範囲で、行動とキャリア・プランを立てる射程を得る。その反面、絶えず移民を促しているのも受け入れ国社会への同化を妨げているのも、ポーランドの高度な安全保障にほかならない。したがって、かれらは最後まで現状を保つしかないか、あるいは結果として摘発や送還を免れるために同化せざるを得ない非合法移民と

なることが多い。ドイツ語能力やドイツ社会に関する知識がないために、「法律上ドイツ人」市民である人びとは、送り出し国にあるそれぞれの企業に完全に依存することになる。ある会社の経営者は、移民についてこのように語っている。「かれらは誰かが面倒をみってくれることをわかっているのです。かれらには働いて金を稼ぐ意欲はあるが、それだけのことです。[中略]かれらは [ドイツの] 赤いパスポートをもっていれば必要なものはなにもないと考えているので、ただ金を稼ぐ必要があるけれど、それ以上必要なことなどないのです」。

このように語られる二重市民は、二つのナショナルな社会の要求を軽々こなす資源に富んだアクターというよりも、搾取されやすかった1950年代のゲストワーカーのほうに近い。だが、そのような資源に富むアクターはシレジア系移民のなかに確かに存在している。かれらは、ナショナルな求人市場を無理なく移動するのに必要となる言語能力や文化資本、職業的資格や社会資本を有す。受け入れ国で資源に富むアクターとなっている移民がいる一方で、依存的な「ゲストワーカー」のままの移民もいる理由は複雑なため、ここでは詳細に踏み入らないことにしておく。「ゲストワーカーの生活様式」を選ぶ理由をひとつ挙げると、雇用機会を多く提供して移動を促すトランスナショナルな移民産業の存在がある。だが、同時に移民産業は、移民の生活を自由のきかないものとし、かくして受け入れ国社会と直接交流する機会もその必要性も制限するこ

ともなるのである。

こうした移民産業の台頭は、産業化を遂げたどの国家でも見て取れる重要な展開と手に手を取って進んでいる。すなわち、「標準的な労使関係」が低迷していること、さらにそれが不規則で不安定な雇用形態に置き換えられていることである。こうしてシレジア出自の移民のなかではパートタイムや短期の仕事が圧倒的に多くなり、かれらは大抵そのような仕事を別の不安定な職や学業、あるいはポーランドでの終身雇用と掛け持ちするようになっている。大規模な社会情勢のあらゆる進展と同様に、因果関係や勝敗を同定するのは難しい。その一方で、ドイツの不安定な仕事がかような種類の移民を促し、そもそもその状況を生み出す場合もある。そして今度は、移民の生活をますます不安定なものにしてゆくのである。他方で、こうした過程はポーランドのほうがかもっと深刻である。同国では、計画経済から「脱工業」経済への転換がほぼ即時的になされ、短期労働移民が魅力的または不可欠とさえ考えられていた労働市場に衝撃を与えたのだった。このようにみれば、今日の世界では、移民は古い同化モデルに当てはまらない驚くべき興味深いパターンを呈しているとわかるだろう。（佐藤崇子訳）■

# > Local Cosmopolitanism

## ローカル・コスモポリタニズム

by Jeffrey C. Alexander, Yale University, USA, past Chair of the ISA Research Committee on Sociological Theory (RC16) and recipient of the ISA Mattei Dogan Foundation Prize, 2010  
ジェフリー・アレクサンダー(米国イェール大学、前ISA内社会理論部会(RC16)代表、2010年度 Mattei Dogan Foundation賞受賞者)



Here are two contrasting aesthetic representations of nature, one Chinese and the other American. Neither is based on indigenous experience, however each is stylized by long-standing cosmopolitan as well as local traditions and styles. In other words, art never represents nature objectively, any more than sociology transparently represents society.

Piotr SztompkaとMichael Burawoyとの間で交わされた本討論は、とても実りのあるものであり、だいぶ熟してきたものである。彼らは世界で最も優れた社会理論家たちであるが、逆説的なことに彼らの対話が重要である理由は真新しいアイデアに満ち溢れているからではない。反対に、彼らの相違はすでに確立され真実とされたものであり、社会思想そのものと同様に古いものである。それはもちろん、まさにこれらの問題は過ぎ去ることなく、彼らの討論は定期的に研ぎ澄まされ更新されるべきなのである。

社会学は合理性、普遍性、そして論理的一般性を志している。しかしながら、これらの命題は「自然科学の素晴らしい業績を表すものである一方、Wilhelm Diltheyが一世紀以

上前に述べたように、人文科学にとっての野望をもたらす以上のものではありえない」のである。芸術のように、社会学は生活経験というローカルな環境に根ざし、それを反映している。しかしながら、これは社会学が純粋にローカルで自己言及的に実践されているという意味ではない。

重要な絵画というものは常に、表現様式を探るローカルな努力が払われてきた様式を超越する審美的な伝統によって様式化されてきた。中国の帝国期において、そのような外的な様式化はいわゆる古典的な伝統によるものであった。19世紀に成熟期を迎えた現代西洋美術において、ヨーロッパを地元とする画家たちは、自分たちがいわゆる近代的な伝統と呼んだものについて、絶え間なく言及した。国レベルでのアバン

ギャルドを構築することを望んだ者たちは、ローカルな伝統とパリを中心として興じてきていた超国家的な審美論をハイフンで結びつけることにあらゆる努力をし、コスモポリタンな場所であるパリに留まるために国家的なローカル性をしばしば無視した。

それは社会学と何ら違ってはいない。芸術と同じく、社会学は「ローカル」であるが、それは特定の時間や空間におけるあるコミュニティの社会的な経験を解釈するための努力から生じたものだからである。米・英・仏そして独の社会学に例外はない。それぞれは他とは違っており、それぞれの違いは、社会的に何が最も知られるべきなのかを決定する時間と空間の経験を反映している。

我々は各国の社会学を読むことにより、国家の主要な関心事が解釈を必要としていることや、国家レベルでの権力闘争や国家内で対立している文化の意味について、多くのことを学んでいる。我々はもちろんこれら全てを、学会での報告や出版の形態をとる文章を通じて、社会的な論者が世界で相対的に共通な言語とされている数か国語に翻訳された場合のみ、知りうるのである。ローカルを超える言語に訳されてこそ、ローカルの事象や具体性に対する知識を増すことができる。

しかし芸術同様、ローカルレベルにある社会的な努力は、具体的な時間と空間の産物として、容易に概念化される。その土地固有の社会学はほとんど固有のものではない。それらは、ローカルを超える国家の知的伝統と、何世紀にも渡り地域と国家のアイデンティティを再構成してきたグローバルな知性と地域的な伝統によって媒介されてきた。確かに、中国、台湾、インド、韓国、日本の社会的伝統があり、それらはローカルの知識や洞察の源として深く大切に

されてきたものを表している。しかしそのような努力は、ローカルの状況をほとんど反映していない！そうした研究を生み出すローカルな社会学者たちは、グローバル化した訓練施設の産物であり、自らを広範な地域的・国際的な古典から引き離し、脱中心化され、コスモポリタンな方法で自らのローカルな社会を理解してきたのである。

そのような「ローカルなコスモポリタニズム」の存在こそが、ローカルであれ、すべての実践的社会学者たちを、個人レベルを超えた妥当性の基準へ、つまり彼や彼女の地元の施設や社会状況により培われた真実の基準へと向かわせる。世界のすべての社会学者は理性的な願望を持っていると示唆することは、いささか誇張にすぎないだろう。同僚が、単に自分たちの仕事がローカルな問題を述べることに熱心であることや、まして彼らのようにその仲間がアフリカ人、インド人、アメリカ人、中国人であるからということで、真実性を覆い隠そうとすることは誰も許さない。社会学は脱中心的であるから、再帰的なのである。社会学は再帰的であるか、全くの無なのである。

芸術も同様だ。19世紀の大半に渡り、アメリカ絵画はヨーロッパの潮流からほぼ切り離されており、そしてプライドに満ちて偏狭であったと今日では理解されており、民衆的そして「素朴なもの」として、時には非常に尊重されている。合衆国が19世紀後半に進歩したように、高みを目指す画家たちはヨーロッパ、多くはパリへと旅し、20世紀前半にはアメリカの新しいコスモポリタン・ローカルたちが、独自でありながらもフランス流の学校から派生したものを作った。アメリカが第二次世界大戦後に卓越した力を持つ存在となった時のみ、アメリカの絵画は自己の領域へ戻り、自己の権利に基づいて世界的なものとなったのである。「ニュー

ヨーク学派」は新たなグローバルな審美観を打ち立てた。しかし、巨大なアメリカのメトロポリタンに物理的には存在しているのに、抽象的表現主義はアメリカの固有な伝統を反映したものととして、ローカルなものとはほとんどみなされていなかった。その代わり、それは50年前にヨーロッパに端を発し、日本やアフリカそして先コロンビアの先住民の審美的主題を批判的に取り入れてきた現代の審美観が拡張したものとされた。

そこで社会学。我々は幸運にも、非西欧社会の驚くほどの近代化によって500年ほどの間で初めて西欧の覇権に挑戦できる時代に生きている。結果として、多元的モダニティのこの過程は、西欧の経済的な剛勇さと軍事力だけではなく、その覇権に基づいた社会学の理論と方法にも対峙することになる。しかし、中国、インド、韓国、南アフリカ、もしくはロシアの思想家が彼ら自身の理論的そして方法論的な挑戦をあきらめるとき、彼らは土着の種族としてそのようにするのはではない。彼らの仕事は、強烈に知性がグローバル化した世紀の産物となるのである。

ある特定の社会学から、新たな普遍性が生じるのではない。真の特殊性は、社会学や芸術のなかにあるのではない。真の普遍主義などもない。いずれも存在しないし、同時に両方も存在するのである。(芝真里訳)■

# > Latin America A Community of Destiny?

## ラテン・アメリカ—運命共同体なのか？

by Paulo Henrique Martins, Federal University of Pernambuco, Brazil, and President of the Latin American Sociological Association

パウロ・エンリケ・マーティンス(ペルナンブコ州立大学、ブラジル、ラテン・アメリカ社会学会長)

**グ**ローバル化は、知の生成に関する新たな空間を作り出した。それは、近代に関して考察する際の特権的な中心としてのヨーロッパに伝統的に支配されてきた知に関する分業を変えるような空間である。アージュン・アパデュライのような何人かの著者にとっては、「第3世界」はもはや「北」にとっての情報の工場ではなく、結果として「北」は「南」に対する知識の生成者としてのヘゲモニーを失った。この新しい見方では、グローバル化はフィールドの多数化としてあらわれる。そしてそれらは、知の生産の中心としてネイションを排除することなく、国境を超えた複雑な地理的過程をへて社会的な知を形成する。

特にラテン・アメリカについて考えるとき、知のグローバル化は学問としての社会学の認識論的な基盤に重大な変化をもたらす。1940年代～1980年代という初期においては、経済的・政治的従属としてのグローバル化を反映して批判的な思想が多く形成された。これは当時2つの主要な思潮としてあらわれた。1つめは、1948年に地域の経済発展を考えるために創設されたラテン・アメリカ・カリブ海地域経済委員会(CEPAL)によって提起された構造主義であった。その主要な理論家は、2人の経済学者、アルゼンチンの



ラウル・プレビシュとブラジルのセルソ・ファータロであった。彼らは、原材料生産国を危うくさせる国際貿易の悪化を食い止めるため発展の主体としての国家の重要性を擁護した。2つめの潮流、セオトニオ・ド・サントス、R.M.マリニ、フェルナンド・エンリケ・カルドソ、エンゾ・ファレトな

どの論者によって示された従属理論は、中心—周縁関係に関するCEPALの分析の政治的側面を発展させた。彼らは、従属を乗り越えることは、国内の資本家階級、国際的な資本家階級、さまざまな庶民階級との特定の協調関係にかかっていると主張した。

1980年代から現在に至るまでのより近年には、社会学はグローバル化に関する多様な理解を受け入れてきた。一方には、経済のグローバル化が「中心」と「周縁」の区分を消滅させ、国民諸社会を後退させ、経済、財政、技術、文化の同一性を強化すると主張する新自由主義者がいる。この均一性の論説は、抽象的な経済理論から影響を受けており、それによれば社会学は政治的・文化的な差異や物価の安定策を超越するグローバル消費の重要性を軽視しているとする。新自由主義者にとって従属に関する論法は時代遅れである。他方には、従属関係は権力や知識の「植民地化」という形式で再編成されていると主張するポスト従属理論の理論家があり、世界システムにおける「富める社会」と「貧しい社会」との矛盾を再考している。「植民地化」の理論家は、ヨーロッパの理論を、「南側」社会の社会的、経済的、政治的、文化的、宗教的な特殊性を考慮せずに適用することの不可能性に気づいている。この2つめのラテン・アメリカ思想の「ポスト植民地化」傾向は、植民地主義と反植民地主義との歴史的衝突を認識しつつも、同時にグローバルな規模での統制と支配の新たな手段にも光を当てている。

ラテン・アメリカのポスト植民地理論は、「植民地主義」や「反植民地主義」といった言葉を単に「西洋」の歴史の遺物としてみることをしない。理論家にとってこうした説明は、ボアベンチュラ・ド・サウサ・サントスなどが「コンタクト・ゾーン」と言うように、世界システムにおける様々な経験や発想を理解する際に必要な認知的・言語的戦略である。植民地主義と反植民地主義は、グローバル化を映し出す2つの側面として機能し、「

## “dependency relations are being re-organized as a form of ‘coloniality’”

従属関係は「植民地化」という形式で再編成されている

北」と「南」の間での情報、イメージ、考え方の翻訳を仲介する。論者にとって、グローバル化は、国際的な出版や、ISAやALAS(ラテン・アメリカ社会学会)のような国際学会における世界規模のフォーラムや活動を動かす複雑な翻訳プロセスを含む。こうしたことを背景に、社会生活の政治的、道徳的、美的、倫理的、言語的な諸要素が育ち、知の生成の多様な拠点間での新たな交換様式を増加・発達させる。カサノヴァ、クイジャノ、ランダーらラテン・アメリカの著名な論者は、イマニュエル・ウォーラーステインなど北側の人物と同様、植民地主義の新たな理論が確固たるものになると述べている。

最後に、ポスト・コロニアルの社会は、グローバル化の植民地化過程で、均一の文化的、歴史的、政治的な力に従属してきたわけではないことも忘れてはならない。実際に、ラテン・アメリカにおける学問としての社会学の特徴の一つとして、この地域は運命共同体となりうるという期待が多くの人々に共有されている。このレンズを通してみると、「ラテン・アメリカ」という表記は、植民地主義を通じて形成された言語共同体、すなわち先住民や奴隷として連れてこられたアフリカ出身者、ラテン系でないヨーロッパ移民、さらにはアジア人など歴史的に重要な他のコミュニテ

ィを排除し「ラテン・アメリカ系」を強調している点で、象徴的な意味において正確ではないという点に注意が必要だ。ラテン・アメリカを運命共同体になりうるものとして了解することは、学問的な意見交換を活発にし、この地域の社会学にまとまりを与える、力をえてきている1つのユートピアである。(高見具広訳) ■

# > The Lamentable State of Post-Soviet Sociology

## ポスト・ソビエト社会学の嘆かわしい現状

by Victor Vakhshayn, Moscow School of Social and Economic Sciences, Russia  
ビクター・ヴァクシュタイン(モスクワ社会経済科学学校:ロシア)



Echoes of the Soviet Era at the Third All-Russia Sociological Congress of 2008.

ここ数年、ロシア社会学の知的空間は闘争の場となっていた。今日の社会学的研究のうち実に約2/3程度は、社会学そのものに関するものであるように見える。社会学の社会学は、たとえそれが主流とはいえなくても、一般的に好まれるテーマであるといえるだろう。ソビエト連邦の崩壊と「社会変革研究の必要性」は、もはや社会科学における唯一の正統的な研究基盤ではない。いまや社会科学におけるポスト・ソビエト草創期は終わりを告げ、これまでの数十年の

無反省な思考に代わって、強迫的なまでのハイパー・リフレクシヴィティが到来した。

### > ネオ・ソビエト言語

ここで近年の闘争以前の社会学言語の風景を振り返ることに意味がある。まずは、2008年に行われたロシア社会学会第3回大会から見ていくのが好都合である。大会では、様式的空虚さをまとうネオ・ソビエトの言語的パターンがはっきりと表された。それは「持続的発展という社会的ニーズ

のために、質の高い応用社会学的研究を供給しなければならない」だとか、「今日の社会学は、社会、生理学や経済、エネルギー、協同関係、その他の安全保障のための社会的要求を研究するという課題に直面している」といったものである。たとえば、大会参加者2500人に対して実施された統計結果をみてみよう。そこからは、回答者の73パーセント(大会参加者の四分の一程度)が自国以外の言語の使用には辞書が必要と回答し、40パーセントが2000年以降に政府あるいは政府と関係のあるビジネスに雇用され

>>

ており、66パーセントが主要な雑誌であるSocisを購読していることが判明した。また教科書はV. Dobren'kov & A. Kravchenkoによって編集されたものがもっとも多く読まれ、もっともよく言及された外国の研究者はZygmunt BaumanとPiotr Sztompkaであった。

社会学の定義を問う質問への回答は、「社会学は社会の科学である」というものが最も多く、社会の定義についての質問にはほとんどが無回答であった。また、回答されたもののなかでも「社会はsociumである」とする定義がもっとも多かった。このような同語反復は、社会学を国家に有益な社会のテクノロジーであるとみなす保守派の意味論である。理論が必要だとしても、それは国内問題に照準したロシアの理論である。また大会のなかでは、「オレンジ革命」を煽動する「西側にカネをもらっているリベラルな社会学者たち」に対して非難が向けられていた。会議では、強固なネオ・ソビエト社会学の言語が、固有のコード、理解のメカニズム、共有された自明性、同語反復の論理をともなう、いま形成の過程であることが示されていた。

### > 反ソビエト言語

では次に、もうひとつの社会学言語についてみてみよう。ここで、18年にわたって定期的に開催されてきた「Russian Pathways(ロシアの道)」という異彩を放つ社会科学系のシンポジウムを見過ごすことはできない。その定期刊行物(1993-2008)からは、「反ソビエト」的言語のコードとメタファーがますますわかりにくいものに姿を変えてきたことが理解できる。ここで興味深いことは、「変革」を意味するものが、ひとつの概念から、どのようにも解釈できるようなメタファーへと変わってきた過程にある。ネオ・ソビエト言語と同じく、それはすべての人に受け入れられ、論証が不要であるような、その語自身の自明視された主張を含んでいる。それは第一に、ソビエト社会学とその継承者たち—保守的なネオ・ソビエトの二重語法(doublespeak)—のもつ硬直した言語に対して、批判的立場をとる。第二に、社会学は進歩—市民社会、民主化と解放—に資するという、明確な諸理念を用いる。そして第三に、それは経験的研究の重要性を強調する。精確に記述された「ロシア社会の

真の問題」のソシオグラフィーなどがその例である。ここで継続して繰り返される「社会の本当の問題」は、社会が独特な問題と病理を含んでおり、研究者に対しアジェンダを押し付けるような客観的な総体である、というナイーブなリアリズムをさらけ出している。『自然の書』が数学の言語で書かれていると考えたガリレオと同じように、ナイーブな現実主義者は『社会の書』が社会学の言語、もっと言えば「彼らの」社会学言語で書かれていると考える。「ロシアの道」の意味論は、出版されてから15年経過するなかで、本質的に変わってしまった。ロシアの将来について1990年代中頃に交わされた激論にはじまって、「ロシアの道」は1990年代後半までにそのラディカルな動力を失い、体制への「リベラルからの批判」の様相を呈した。しかしながら、そのレトリックの進展にもかかわらず、根底にある記述方法は不変のまま維持された。すなわち「これはあるべき姿ではない」が、1990年代では「これはまだあるべき姿でない」となり、2000年代では「これはあるべき姿とは根本的に異なる」というように。

### > ポスト・ソビエトの集合点

ちょうどネオ・ソビエト言語の主要な常套手段が同語反復であるように、「パラドックス」は反ソビエト言語における決まり文句である。それは「現状」と「あるべき姿」のあいだにあるギャップに注目するものである。私は、この2つの言語に大差はなく、それらはともに根本的にソビエト的であるということをも主張する。

#### 1. 懐疑の文化

2つの叙述の形式は、「どんな知識もその背後には政治的利害関係がある」という仮定をともに共有している。何が語られたとしても、それは実際考えられていることではなく、そこで用いられる言語はそれを語る者が仕える政治的利害関係を反映している。それゆえすべての理論は、それがもたらす「結果」、すなわちどんな達成が求められているかという点から見られる。

#### 2. 噛み合わせ

ネオ・ソビエト言語においては、社会学は国家に従属し、研究は社会テ

クノロジーによって置き換えられる。他方、反ソビエト的な意味論においては、科学が——科学それ自身に益するのではなく——進歩という利害関係に資するものであると仮定されている。そこには「知のための知」という観念はなく、ましてや科学についての——科学それ自身の価値に根ざし、知そのものが動機を提供するという——ヴェーバーのアイデアはありようもない。ふたつのポスト・ソビエト的思考形式においては、知が重要問題の解決と噛み合わなければならない。

### 3. 理論的ナショナリズム

われわれの土壌に根ざさないならば、「西側からの」理論的遺産の輸入を禁止せよ。この「土壌」という語は、第三回社会学大会に用いられた言語である。「ロシアの道」の言語は、もう一つの生々しいメタファー——「祖国のポプラ」——をもつ。そのため、輸入された理論的概念への反感は、ネオ・ソビエト的記述法と反ソビエト的記述法という記述における共通の特徴なのである。

### 4. 反省の欠如

数年前には「保守」と「リベラル」は双方ともに、方法論的反省を退けた。そうして両者は「ポスト近代的逸脱」、すなわち「実際にいまあるがままの現実」を研究するという崇高な責務からの逸脱を認めたのである。今日、再帰性が押し寄せ各自の状況はまったく変わってしまった。それはしかしロシア社会学の発展を阻害するもう一つの過剰反応である。

確かに、この同語反復とパラドックスという二つの意味論は、ポスト・ソビエト的スペクトルの全体をカバーするものではない。他にも、理論的「主流」の外部に、あるいはモスクワ環状(たとえばサンクトペテルブルグ)のはるか向こうに生じた言語もあった。この広い世界では社会分析、フレーム分析、現象学やエスノメソドロジーの主導者が科学的なアドバンテージを得ることの困難に面している一方、他方のロシア社会学における保守とリベラルの対立は、社会学的議論が政治的に限定されたジャーナリズムと同様の様相を呈するという結末をもたらしている。(福田雄訳) ■

# > Maori Sociology in New Zealand

## ニュージーランドにおけるマオリ社会

by Tracey McIntosh, The University of Auckland, New Zealand  
トレーシー・マッキントシュ(オークランド大学:ニュージーランド)

ニュージーランドは入植者の国である。ニュージーランドには植民地であった過去があり、現在もそれに由来する問題に直面している。このことは、ニュージーランドにおける社会学は、もともとニュージーランドに住んでいたマオリと、そうではない非マオリとのあいだにある利益と不利益の再生産の問題を検討すべき立場に置かれていることを意味している。マオリ研究を行う社会学者として、私は、社会学者は異文化間の社会的公正に関する研究に大きく貢献していると考えている。ニュージーランドでは、マオリ研究を行う社会学者は相対的には多くはないけれども、マオリの経験を中心的な研究課題とする非マオリの社会学者は、かなりの数存在する。

植民地化されたというマオリの歴史的経験と、周辺化され、剥奪され、困窮しているという現代におけるリアリティは、マオリのエスニック・アイデンティティが葛藤と抵抗を抱えていることを意味している。tangata whenua(もともとその土地に住んでいる人という意味のマオリ語)として、マオリはニュージーランド社会での自分たちの立場が非常に危ういものであることを自覚している。マオリは、先住民としての当然の権利である彼らの慎ましやかな達成を誇張する政治的・大衆的なレトリックに対して、しばしば抵抗してこなければならなかった。マオリの政治的闘争は、過去(といってもかなり最近のことであるが)に不当に奪われた彼らの土地と資源を取り戻すことを目指して行われてきた。これらの闘争のうち成功したものは、マオリの生活のあらゆる領域が政治的な問題にされ、精査されてきたことを意味している。

マオリと非マオリのあいだに大き

な不平等があることは明白である。マオリの状態に関する様々な研究から、マオリは生まれに基づく不利に苦しんでいることが明らかになっている。マオリの幼児は、非マオリの幼児よりも死亡する確率が高い。マオリの子どもは早期教育に参加しにくい傾向がある。マオリは非マオリに比べて、学校に行かなくなったり、退学したりすることがとても多い。それによって彼らの教育は進まず、若者の犯罪が増えている。マオリの失業率は非マオリの失業率よりも著しく高いし、マオリの収入はかなり低い。生活保護の申請と受給もマオリのほうが多い。多くのマオリは不適切な住居に暮らし、非マオリよりも精神的・身体的な健康状態が悪い。マオリの不利と差異は、犯罪と公正に関する領域で最も明白になる。被害者・加害者の両方でマオリが占める比率は高い。さらにマオリはニュージーランドの全人口の15%に過ぎないが、刑務所に収監されている人びとの50%はマオリである。あまりにも多くのマオリの生活が失業、病気、精神的疾患、貧困、刑務所と結びついている。ニュージーランド社会におけるマオリ文化の立場と正当性は、その文化や言語への敬意が払われて1970年代以降、大いに高まったが、マオリが直面する様々な社会的不平等を考えると、マオリのルネッサンスはとうてい成功しているとは言えない。

社会学的な研究は、このような問題を解決するために重要な役割を果たすことができる。研究の威力は、チームのメンバーが、自分たちが依拠する様々な研究の伝統を動員し、得られた知見を広く共有するプロジェクトにおいて最も明白な形で証明される。これは権力の問題を隠すことではない。あらゆる研究活動は、権力(と非権力)のダイナミクスによ

って占められている。権力関係は、研究計画に対する初期投資から研究対象者の参加、研究の遂行や結果の公表まで、研究過程に広く行き渡っている。それにもかかわらず、社会的公正の帰結への着目は、研究者と研究対象者が対面する挑戦と機会に光を当てることになる。

結論としては、私はマオリを主たる関心事とする研究環境で、文化横断的な問題についてじっくりと考えたい。現代の環境では、初めから終わりまでマオリの人びとにリードされて行われている研究がある。しかし、非マオリの研究者は必要不可欠な役割を果たすことができる。特に、非マオリの研究者が研究の伝統からの束縛を離れ、マオリが自己決定した文脈の中で研究したいと望む場合にそれが当てはまる。最近まで、マオリのコミュニティはメインストリームの研究(しばしば「ゆがんだレンズ」を用いている)からは利益を得てこなかった。今日、マオリによるマオリのためのマオリ研究が重要であるとの主張もある一方で、マオリのコミュニティは、共同作業を行うマルチ・カルチュラルな研究から得られる利益を認識している。虐げられた集団のメンバーは、支配空間の中でなんとか生きていくために、支配集団について生活領域のあらゆる場面でインフォーマルに学ばなければならなかった。共同作業を通して、われわれは非マオリの研究者に対して、われわれのことを理解してもらうことができる。さらに、彼らの彼ら自身に関する理解もより一層深まるだろう。(塩谷芳也訳) ■

# > A Note on the “New Poverty” in Post-Soviet Armenia

## ソビエト連邦後のアルメニアにおける 「新しい貧困」について

by Gevorg Poghosyan, Director of Institute of Philosophy, Sociology and Law of the Armenian National Academy of Sciences, and President of the Armenian Sociological Association

ゲボーク・ポゴシアン(アルメニア共和国国立科学アカデミー哲学・社会学・法学研究所所長、アルメニア社会学会会長)



ソビエト連邦の崩壊にともなう20世紀末の社会変動によって、新たな歴史の時代が始まった。

ソビエト崩壊後に誕生した国々では社会の近代化が起こり、発展にともなう様々に深刻な問題が発生した。どの国においても「近代化からのリバウンド」と産業の空洞化が発展のある段階で共通して発生した。問題は、近代化のモデルが民族的・文化的プロセスを排除している点にある。

アルメニアの場合は「近代化からのリバウンド」が深刻な産業の空洞化をもたらした。これによってアルメニアの経済活動は原始的な形態に移行し、特に農業部門でその変化が顕著に見られた(Poghosyan 2005)。ソビエト後の民営化によって富が一部の企業家に集中し、極端な貧困が生まれ、中流階級は発達しなかったのだ(Poghosyan 2003)。

近代アルメニアの社会構造の変革は、まだ進行中であるが、決定的な変化をもたらした。全国規模の社会学的調査にもとづいて、われわれは以下のモデルを作り上げた (Poghosyan 2005)。

- 最も高い階層: 政治的・経済的エリートで、大資産家や支配層の政

治家(全人口の5-7%)

- 中層: 小規模な会社の経営者・自営業者や、給料の高い専門職や国家公務員、管理職 (10-12%)。
- マジョリティの層: 事務員、販売・サービス業従事者、農業労働従事者、知識人、年金生活者、小売商、一時的に失業している人びと (65%)。
- 社会の「底辺」: ホームレス、恒常的な失業者、売春婦、社会的「敗者」(15%)。

アルメニアの社会は多層化しており、階層間の生活水準の差異が拡大している。人口の大部分が周辺化され始めており、特に失業の結果として周辺化されることが多い「新しい貧困」として特徴づけられる現象は、社会変革とそれまでの経済システムの崩壊によるものであり、アルメニア社会に固有の文化的特徴に由来するわけではない。そのような貧困は、ソビエト時代には見られなかった。

さらに、この「新しい貧困」は第三世界に見られる大量の貧困とは共通点を持たない。第三世界の貧困は、悲惨で、教育を受けておらず、子供の死亡率が高く、公衆衛生に問題があることが特徴である。これらの特徴はいずれもソビエト後の「新しい貧困」には該

当しない。新しい貧困は、教育水準が高く、医療制度に守られ、生活状況が良好な人びとを苦しめている。「新しい貧困」は、過去の時代においては十分に満足していた人びと、労働者や事務員、知識人、年金生活者、家政婦などに影響を及ぼす。同様の「新しい貧困」は、世界金融危機のあと、いくつかのEU諸国やアメリカでも見られる。

貧困に打ち克つための伝統的な戦略は、第三世界の経験に基づいているので、このような貧困に対しては適切なものではない。われわれは新しい貧困に打ち克つため、それぞれの国の民族的・文化的な特殊性を考慮した新たな概念と戦略が必要である。アルメニアの場合は、人びとの経済活動が活発で、教育程度が高く、アルメニアのディアスポラからの投資が期待できるため、中小規模の企業を速やかに発展させることに解決策があるだろう。(塩谷芳也訳)

### References

- Poghosyan, G. 2003 Armenian Society in Transformation. Yerevan, Armenia: Lusabats [Russian].  
—. 2005 Current Armenian Society: Peculiarities of Transformation. Moscow: Academia [Russian].

# > The Vital Life of *Current* *Sociology*

by Jennifer Platt, University of Sussex, UK, and ISA Vice-President for Publications, 2010-2014, and Eloísa Martín, Federal University of Rio de Janeiro, Brazil, and Editor of *Current Sociology*

An early trend report of *Current Sociology*, still widely cited.



**C**urrent Sociologyは最も長く続いている社会学系ジャーナルの一つであり、今年60周年記念を迎える。当紙の発展は、1950年代以降の社会学の国際的進展の全体像を非常によく表している。ISAはユネスコの依頼に応じて設立されたため、そのジャーナルはユネスコの著作物として創刊された。1957年、理事長になったTom Bottomoreはジャーナルの編集権も引き継いだ。(1973年、Margaret ArcherはISAの他の役職についていない初の編集長となっている。)ジャーナルの当初の主な任務は、最新の社会学の全書誌目録を提供することによって、国際的なコミュニケーションを促すことであった。ジャーナルがそれを実行できるほど、当初の対象領域はまだ狭かったのである。書誌目録の標目の分類項目には、「低開発・発展途上国の人びとの社会学」が含まれていた。これは、ユネスコの活動原理と当時の「比較」理論アプローチの双方を反映していた。この理論は、非産業化社会と産業化社会を対照的に捉えていた。

しかし、急速にその主眼は、宗教社会学、科学社会学、政治社会学、教育社会学などの特定領域の書誌目録へと向けられるようになった。それぞれには、当時の著名な人物による

「動向レポート」が付けられた。おそらく、なかでも最もよく知られているのがS. M. Millerによる1960年の「比較社会移動」であろう。これは、それまでの社会移動研究の結果を比較し、全体的な結論を導いているものである。ゲーグルスカラーよれば、これは253回も引用されており、中にはごく最近の引用もある。

1963年の号では、研究委員会から関連論文の特集が導入され、最初は家族社会学についての号となった。やがて1990年代には、これらは別のカテゴリーに分類され、Current Sociology Monographsとなった。初期のころから、いくつか号は一つの地理的地域に限定されていたが、それがどの地域に限られたトピックなのか、もしくは、言及されている社会学的研究がどの国で実施されたかは、タイトルに必ずしも明示されていない。時がたつにつれて、Scandinavian Sociology (1977), Anglo-Canadian Sociology (1986)など、国全体の社会学をレビューする号も登場するようになった。他に多くの情報源が簡単に利用できるようになり、1997年になると、ついに、動向レポートのモデルは現代的ニーズにそぐわないことが決定的となった。Susan McDanielの編集のもと、ジャーナルはピアレビュー・ジャーナルの伝統的なモデルのもと再始動した。特に、社会学的研究における新発見と新たな論争に着目していたが、実質的領域、概念、理論、方法論などにみられる世界的発展にも依然

として目を向け、幅広い国際的社会学系の組織にも目を配っていた。

Dennis Smithは、Susanの先駆的な努力を引き継いで、2002年から2010年まで編集長となった。この8年間に、彼が個人的な刻印をジャーナルに刻んだのは明らかであった。彼は、アカデミックの世界の新たな需要に応え、斬新な展望を打ち出したのである。彼の編集の元、ジャーナルはISIに登録され、すでに非常に高くランキングされている。さらに、投稿された作品に垣間見られる社会学的課題を読み取る彼の才能のおかげで、Dennisの編集能力は、投稿作品とその方向性を批評的に論じる場に結実したのである。これは、著者と査読者が多様なトピックにともに従事できる意見交換システムを組織化することによって、部分的に達成された。

Current SociologyはISAの公式言語である英語、フランス語、スペイン語の投稿を受け付けてきたが、出版委員会の決定によって、英語で執筆することに困難を感じている研究者の出版を促進するため、今や実質的には全ての言語で書かれた投稿を受け入れている。こうしたシステムは、英語圏外で仕事をしている研究者、とくに周辺国在住の研究者に、かれらの研究上の発見を国際的読者と共有できるユニークな機会を提供している。2010年、Eloísa Martínは編集権をひきついだ。アカデミックの世界では中心的ではない学術機

関の出身で、英語話者ではない人物がジャーナルを取り仕切るのは、初めてのことであった。これはISAの会員資格の変化を象徴している。会員になれる地域を世界中の国に広げ、ジャーナルの未来に新しい挑戦を投げかけている。

近年、世界各国の大学は共通の関心と不満を抱えている。つまり、「書くか消えるか」の問題である。研究資金、プロジェクトの認可、名声などは、第一に、研究者の業績数次第となっている。そして、その研究が発表されたジャーナルのランキングにも左右される。こうした状況下で、そしてそうした状況にもかかわらず、Current Sociologyは社会学者たちが互いに論じ、批評し、切磋琢磨でき、さらには、他の学者によって丁寧になされる査読によって対話的な意見交換ができる伝統を重んじている。こうした意見交換をへて、われわれは、ローカルな現実をじっくりと考えながらも、社会学を必然的にグローバルなプロジェクトとして思考することができるような、発見に役立つ道具立てをみつけることができるかもしれない。(三部倫子訳) ■

# > The Global Classroom

## グローバル・クラスルーム

by Larissa Titarenko, Belarus State University, Minsk, Belarus, and Craig B. Little, State University of New York at Cortland, USA ラリッサ・チタレンコ(ベラルーシ大学)、クレイグ・B・リトル(ニューヨーク州立大学)



Professors Larissa Titarenko and Craig Little, architects of innovative international teaching collaboration.

**新**しいナレッジ・ソサエティはインターネットを介したコミュニケーション技術(ICT)に大きく依存するものである。ICTが新しく出現することによってわれわれの生活をいたるところでより複雑なものへと変貌していくが、その一方で、開かれた機会も作り出し始めている。教育の現場では、ICTを利用することで電子ブックやその他のテキストを世界中に配ることができ、オンラインで学生に教えることもできる。公共的な空間としても、ICTを利用することで地理的な距離に関係なくフォーラムやソーシャル・ネットワークを介した情報のやりとりが可能になる。

ヴァーチャルな教室にいる学生はたしかに物理的な空間によって隔たれているが、彼らは同じ教科書で学び、自由にディスカッションするという共通の実践に参加することによって象徴的に結びついている。伝統的な教室とは違い、ヴァーチャルな教室では365日24時間、いつでもログイン、ログアウトすることができるが、それでもなお、彼らはサイバースペースを通して共通の実践を皆とシェアする中で、つながっている感覚を持ち続けることができるのである。

### > オンライン・コラボレーション

一般的な教育の世界では、インターネットは大部分においては伝統的な目的に沿って使われている。たとえば、有益な情報をどこで見つけたらよいか、それを適切に用い、効率的に研究するにはどうしたらよいかを学生に教える、といったことである。遠隔教育、特に社会科学の場合に目を向けると、オンライン・ツールはそれ以外の目的、たとえば

学生の主体的な参加を促進するといったことにも使われている。この場合には、学生同士は必ずしも単一の大学に物理的に近接していなくても、お互いに近距離にいなくてもよい。遠隔教育は都市、町、地域、国の違いを超えたさまざまな学生を、あたかもひとつの物理的な教室に登録しているかのように教育する方法なのである。それゆえ、ヴァーチャル・クラスルームはたしかに目に見えないが、ある意味とてもリアルである。そこでは、知的な交流を続け、議論をし、意見を交換して、共同作業を成し遂げていくことによって、参加者はお互いに励まし合っていくのである。

伝統的な教室とICTによって生み出された新しいクラスルーム。どちらの場合であっても、学生や教師は知の構築作業に参加することができる。しかし、ICTの潤滑油を得た新しいクラスルームでは、学生は学びのプロセスにより接近した感触を得ることができる。彼らは自分の考えを学びのプロセスの中に提供していくため、そこで得られる知識はよりパーソナルなものに、あるいは、より間主観的なものになっていく。すなわち、知識を本の中からだけ取り出すのではなく、オンラインを通してお互いにコミュニケーションし合った結果からも導き出すのである。教師が目に見えるところにいて先導するわけではないので、学生は自分自身の考え方の独自性を保ち、それをより自由に表現できる。

そのため、高等教育に適用された場合について言えば、ICTを導入する利点のひとつは、グローバルにネットワーク化された学生や教授陣に国際的にオンラインで結ばれたコラボレイティブな教育環境を創出する可能性を秘めているということだ。多様な大学や国々からヴァーチャルなクラスルームに集う学生は、インターネット技術を通して相互にコミュニケーションをとりながら、ある特定の主題と一緒に学ぶことができる。遠隔教育においては、学生は自発的に対話に参加することを促される。それに加えて、通常の教育と同じように、テキストの習得度合をチェックする課題も完成させ、指定された学習管理システムを通して提出しなくてはならない。それゆえ、国際的な遠隔教育における負担は学生にとっても教授陣にとってもかなり重い。学生のモチベーションは他の教育方法よりも維持されやすい。というのも、学生は自分のペースで学び、学んだ結果に自分で責任をもち、他国の学生について彼ら自身から学びとることに知的な興奮を覚えるからである。教授陣にとっても、学生が他国の仲間とともに相互に学んでいくのを手助けすることは、この上ない喜びである。オンライン上での議論は数ある課題のひとつにすぎないが、出現しつつあるグローバル・ナレッジ・ソサエティの市民として、学生がもっとも興味をもって取り組めるもののひとつだろう。

>>

われわれは10年に渡ってこうした国際的な遠隔教育に携わり、その中で6つのクラス編成を経験した。学生からのリアクションは、ニューヨーク州立大学コートランド校の伝統的な教室で長年教えている同一の主題(社会的規制)で得られるものよりも、遠隔教育からの方がつねにプラスにでている。ヴァーチャルなクラスの担当教員であるわれわれ二人、アメリカのクレイグ・リトル教授と、ベラルーシのラリッサ・チタレンコ教授は2001年にブルガリアで開かれたAUDEM(Alliance of Universities for Democracy)の国際会議で初めて顔を合わせた。われわれはこの会議で紹介されていた新しいインターネット技術に魅了されて、社会学や文化的な相互理解、比較分析の手法についての学生の地平を広げていくために、いますぐ国際的な遠隔授業を組織しようと意気投合したのである。どの回の授業にも主に社会学を専攻する学生が18~25人ほど登録し、そのうちの何度かにはミラ・ベルゲルソン先生の協力によるモスクワ州立大学を含む、三つの大学も参加している。また、クレイグ・リトル教授が数年前に教授したオーストラリアのブリスベンにあるグリフィス大学からも何人かの学生が参加した<sup>1</sup>。

### > グローバル・シティズンになるために学ぶ

そのため、ここでいう国際的なヴァーチャル・クラスルームは二つ、あるいはそれ以上の異なる国からきた学生から成るユニークなクラスを指している。われわれの場合には、アメリカとベラルーシに加えて、オーストラリア、ロシアである。およそクラスの2/3は英語を母語とする国からの学生であり、ベラルーシから参加した小規模な学生グループは三つの意味でチャレンジングであった。まず、英語で教えるコースを受講したこと。そして、ベラルーシ州立大学では教えられていない社会学の新しい領域(社会規制)に触れたこと。最後に、受講者を中心に授業を組み立てることを旨とする国際的なヴァーチャル・クラスルームの中で学んだことである。多くの場合、ベラルーシの学生は外国に行った経験がないため、訪れたことのない国の若者文化についての他では得難いユニークな知識を習得する貴重な体験となった。また、アメリカとオーストラリアの学生もベラルーシや旧共産圏の国に行った経験はなかったため(実は、その多くの学生はヨーロッパに行った経験もない)、興味関心はほどよく双方向的に発生していた。

われわれのヴァーチャルなオンライン・クラスルームでは、学生は専門的な教科書三冊と、教授陣が書いたオンラインのミニレクチャー、電子的な論文をベースに組み立てられた追加的な課題、それに学生主導のディスカッションから学んでいく。ディスカッションでは学生が相互に質問をしあい、課題文献からあがってくる共通のトピックや世界で起きている時事的な事柄を議論しあう。そこから、外国の文化や歴史的な背景、そして世界中の社会規制をめぐる様々なアプローチを理解していくのである。

われわれはこのヴァーチャル・クラスを何度か教えて、どの回も続けて成功している。講座が修了するときには、すべての学生が書籍からたくさんのことを学んだことはもちろんのこと、特にオンラインによるパーソナルな付き合いから多くを学んだことに満足している。授業評価においても、それぞれの国について他では得難いファーストハンドの情報を得ることができ、質問も自由にすることができたため、一般的によくあるような授業終了間際の時間的プレッシャーや、教師が直にそこにいることによる圧迫感、コミュニケーションのための時間が不足しているといったことはまったくなかったと報告している<sup>2</sup>。

### > 学生への動機づけ

われわれの教育哲学は、デューイによる学習者中心のアプローチから派生している。学生は、多くの実践的なシチュエーションについてオンラインで議論するように促される。たとえば、ローカルな法的強化、犯罪事例、処罰へのアプローチ、権利侵害といった主題である。多くの場合において、学生はそのシチュエーションについて直に議論し、どのような解決法をとるべきか、あるいは特定の国で特定の解決法が採用されている理由は何かといったことを理解しようとする。そこで基本となっているアイデアはベストな解決法を探すことではなく、学生をディスカッションのプロセスに能動的に参加させ、創造的な議論の中から異なるアプローチを比較することへと導いていくことである。たとえば、ロシア、アメリカ、スウェーデン、オーストラリアといった国の様々な社会規制のシステムを学ぶ際には、異なるシステムの有効性を、犯罪統計を基礎に、たとえば代替的な処罰を採用した場合の社会的コストを再犯率の観点から比較することができる。また歴史的な時期を三つの時代、たとえば前近代、近代、ポスト近代に分けて、その間の社会規制のシステムの違いを比べたこともある。学生は皆、三冊の教科書を読まなくてはならない。その上で、進捗具合をオンラインで報告し、手短なエクササイズをして、小論文を書き、グループ活動と学生主導のオンライン・ディスカッションに参加する。われわれの教育実践のプラットフォームには、当初ニューヨーク州立大学のLearning Networkのものを使っていたが、現在はよりシンプルに、ニューヨーク州立大学コートランド校が提供しているBlackboard Learning Management Systemを使っている。

すべての学生にとって他では得難い貴重な経験となったが、中でももっとも重要なものはベラルーシの学生に対するものである。政治経済状況が悪化していく中で、英語で書かれた研究資料へのアクセスはかなり限られてきている。その中で遠隔教育授業は、西欧の学生と同じ方法で学ぶすばらしいチャンスを提供するベラルーシの若者に与えることができた。ICTを使うことによって中心と周縁の二分法を少なくとも部分的に乗り越えることができた、とわれわれは確信している。というのも、すべての学生が平等を真に志向しながらタスクやディスカッションに向き合うことができたからだ。そして、それこそがわれわれが力を入れて促してきたものである。東西の二分法からみても、学生が彼らの間にある境界やステレオタイプを乗り越えるための手助けができたと思う。たしかにわれわれは西欧の教科書を用いたが、そこにベラルーシやほかの国の国際的な情報を織り交ぜて使った。学生はお互いを尊重する限りにおいて、自らの議論にどんな理論を援用しようと、どんな立場を防御しようと、すべて自由に許される。この点に関して言えば、この国際的でコラボレイティブな遠隔教育の経験は、民主主義や人権を学ぶよい訓練でもあった。

ここまでの議論をまとめよう。われわれが実践したコラボレイティブな国際オンライン教育は、高等教育におけるICTの効果的な活用の大きな可能性を示すものである。特に遠隔地にあって政治的に孤立した地域や国々の学生たちに大きな可能性を開くことができるだろう。学生の知識や経験、そして世界観を深め、パーソナルな人間資本を向上させていく有効な方法のひとつに違いない。(池田和弘記) ■

<sup>1</sup> 教科コースの詳細については次の論文を参照されたい。Craig B. Little, Larissa Titarenko and Mira Bergelson (2005), "Creating a Successful International Distance Learning Classroom." *Teaching Sociology* 33(4): 355-370.

<sup>2</sup> 国際的な遠隔授業を計画実施するための有用なリソースとして、Collaborative Online International Learning (COIL)のウェブサイト<http://coilcenter.purchase.edu>を参照されたい。また、技術的な質問についてはクレイグ・リトル Craig.Little@cortland.eduにコンタクトをとってほしい。

# > Bias Against National Associations:

## The Need to Change ISA Election Rules

### 各国の全国学会に対するバイアス問題:ISAの選出方式変更の必要性

by Roberto Cipriani, University Roma Tre, Italy, and President of the Council of National Associations of the European Sociological Association  
ロベルト・シプリアーニ(ローマトレ大学:イタリア、ヨーロッパ社会学会・全国学会評議会会長)

2002年ブリスベンで行われたISA世界大会では、全国学会担当の副会長が初めて選出されるという、大きな一歩が踏み出された。しかし、その選出方法基準はいささか軽率に決定された。そこで意図されていたことは、当然のことながら、その役職を早急に作り出すことにあった。その次に行われる世界大会(ダーバン)まで選挙を先延ばしする代わりに、インドからSujata Patelが初代の各国全国学会担当副会長に選出された(彼女の役職は2006年ダーバン大会で、アメリカに研究拠点を置く英国人Michael Burawoyに引き継がれ、2010年ヨーテボリ大会では南アフリカのTina Uysに引き継がれた)。これまで選ばれてきた三人の社会学者は、その役職にふさわしかったし、それぞれすばらしい働きを行ってきた。

彼らの選出は、投票権をもつ評議会、すなわち各国の全国学会からの代表者によって構成される全国学会評議会Council of National Associations (CNA)と、各Research Committeeからの代表者によって構成される研究評議会Research Council (RC)を合わせた広範な支持を受けた結果であった。ここで、CNAとRCは同じ55票ずつの投票権をもつ。ただし(投票が行われる)世界大会へ参加する人数は後者RCが前者CNAよりも多いため、そこには根本的な不均衡が生じている。過去5回の選挙をみると、そこでの投票者数は次の通りである。2010年ヨーテボリ大会(CNA43人:RC47人)、2006年ダーバン大会(CNA35人:RC45人)、2002年ブリスベン大会(CNA30人:RC44人)、1998年モントリオール大会(CNA38人:RC41人)、1994年ビーレフェルト大会(CNA43人:RC46人)。このようにResearch Committeesが全国学会担当副会長の選出について決定的

な力を持っているのに対して、全国学会は研究担当副会長の選出について同じような影響力をもっていない。

さらに考慮する必要がある点は、世界大会の合間の4年間に、全国学会の会長がしばしば一度以上交代するのに対し、一つのResearch Committeeの会長の在留期間は通常4年間であるため、より安定的で継続的である。これによって、Research Committeeの各会長はお互いに親交を深め、互酬的關係と協同的關係を強めることが可能となる。全国学会の会長の度々の交代は、世界大会の中間年の評議会(そこではより緊密な関係を築くことができる)における会長が、次の世界大会で選挙が行われる時に交代しているという事態を示す。

これらの理由から、全国学会担当の副会長候補者は、全国学会からの支持を受けたときでさえ、Research Committeeの投票数を下回り、それゆえどうあがいても、実際のところResearch Committeeは選挙で研究担当の副会長だけでなく、全国学会担当の副会長までも選出可能なのである。

したがって、各国の全国学会が自分たちのための副会長を選出することができようになり、Research Committeeが研究担当の副会長を選ぶことができることになれば、より妥当で民主的な選出となるように思われる。国際社会学会の一体性は、代表者すべてが会長と他の三人の副会長(財務、出版、プログラム担当)を選ぶようになるときに初めて十分に強化されるであろう。このように、全国学会担当と研究担当の副会長選出方法の変更は特に有益であろうと思われる。(福田雄訳) ■

# > Introducing the Japanese Editorial Team

## 日本語翻訳チームの紹介

今回は、グローバル・ダイアログの翻訳、そして発行に熱心に取り組んでいる日本の編集チームをご紹介します。

**私**たち日本の編集チームは、世界に広がるグローバル・ダイアログの読者に私たちをご紹介申し上げることを光栄に思っております。また、ブラウオイ教授とすべてのグローバル・ダイアログ発行に関わっている人びとによって、世界中で起こる数多くの重要な問題についての多様な経験を分かち合うことができることに、深く御礼申し上げます。そして、2014年に横浜で開催されますISA World Congress of Sociologyにおいて皆様をお迎えし、またそこで復興しつつある日本の経験を共有できればと願っています。



芝真里(しば・まり:編集責任者)。米国Boston Universityにおいて修士号(教育)を取得後、ボストン地域の学校にて様々な背景を持つ子供たちの指導にあたりました。現在は、名古屋大学の社会学講座にて博士後期課程に属しており、ISAにおいてはRC31(Sociology of Migration)に所属しています。研究では、米国とスウェーデンにおける国際養子縁組に焦点を当てています。



岩館豊(いわだて・ゆたか)。一橋大学社会学研究科博士課程に在籍しています。(ポスト)新自由主義の都市状況のもと、若年労働者たちのユニオン実践によって生成する社会空間のフィールドワークに従事しています。



西原和久(にしはら・かずひさ:監修者)。名古屋大学の社会学教授で、日本社会学理論学会の会長や日中社会学会の理事などをやっています。研究領域は、社会理論とくに現象学的社会学の研究ですが、現在はグローバル化とトランスナショナルリズムの研究をおこなっており、東アジアの移動民(とくに日本における外国人農業労働者)、および東日本大震災と外国人の調査研究をおこなっています。ISAでは、RC16およびRC31のメンバーです。



三部倫子(さんべ・みちこ)。京都外国語大学で最初の学位を取得し、現在はお茶の水女子大学博士後期課程に所属しており、同大にて社会科学の修士号を得ている。研究テーマは、セクシュアルマイノリティとかれらの異性愛者の家族についてである。



福田雄(ふくだ・ゆう)。関西学院大学社会学研究科博士課程後期課程に所属。専攻は宗教社会学、集合的記憶論、儀礼研究。これまで日本の慰霊・追悼行事の調査研究に従事してきた。現在は東日本大震災の被災地において支援活動とフィールドワークを行っている。



佐藤崇子(さとう・たかこ)。(米国)ウィスコンシン州立大学スペリオル校にて文学士取得(国際平和研究・スペイン語)。現在、北海道大学大学院文学研究科の博士後期課程。主にアメリカの移民政策と非合法移民のネットワークとの連関を研究中。



姫野宏輔(ひめの・こうすけ)。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程。地域社会学を先行しており、長野県をはじめとする過疎地域のフィールドワークをしています。Global Dialogueの日本語翻訳チームのお手伝いができることを大変光栄に思います。



塩谷芳也(しおたに・よしや)。東北大学にて社会階層と不平等に関する研究で博士号を取得。現在は、東日本大震災後の困窮状況において、被災者間で行われたソーシャル・サポートの提供と受領が、半年後の彼らのメンタルヘルスに及ぼした影響に関する量的調査研究を行っている。



池田和弘(いけだ・かずひろ)。2005年に東京大学を単位取得退学後、2008年まで日本学術振興会特別研究員。現在は上智大学地球環境学研究科のポスドク研究員として、国際調査プロジェクト「Comparing Climate Change Policy Network (COMPON)」に参加している。RC24「Environment and Society」のメンバーである。



高見具広(たかみ・ともひろ)。東京大学で社会学専攻の博士課程に在籍、日本学術振興会特別研究員でもある。主な研究関心は仕事上の裁量であるが、日本における長時間労働問題に特に問題意識がある。

# > John Rex dies at 86

## 訃報 John Rex(享年86)

by Sally Tomlinson, University of Oxford, UK, and Robert Moore, University of Liverpool, UK  
サリー・トムリンソン(オックスフォード大学)、ロバート・ムーア(リバプール大学)



John Rex – Pioneer of Social Theory and Race Relations.

**情** 熱とエネルギーにあふれ、社会学の研究を新たな学究の段階へと導いた、際立った知性の持ち主としてその名を記憶されているジョン・レックスが、2011年12月18日に亡くなりました。彼はポートエリザベス(南アフリカ)に生まれ、18歳の頃、第二次世界大戦中に英国海軍に入隊しました。戦後南アフリカに戻ってから、彼はアパルトヘイトの不正義に鋭く気づいて、当初は神学を研究していたところを、社会学と哲学の専攻に変えました。彼はごく短い間、旧ローデシアの学校で教鞭をとりましたが、反アパルトヘイト運動の支持者——つまり「好まれざる者」であるとして、大学を追放されました。リーズ大学で博士号を取得して1962年までそこで教え、バーミンガム大学へ異動してからさらにその2年間の後の1964年にはダーラム大学、1970年にはウォーリック大学に移り、この2つの大学で教授として社会学学部の創立に努めました。また彼は、1979年から1984

年にかけて、アストン大学の「人種関係の社会科学評議会」の創設者であり同部門の局長でしたが、後にウォーリック大学に戻りました。彼は、講義を行うためにトロント、ケープタウン、ニューヨークを訪問することを除いて、晩年に病気になるまで、ウォーリック大学の教授、名誉教授であり続けました。

社会学理論に対するジョンの情熱は、社会学界をパーソンズの機能主義への依存という重圧から解放し、多くの学生に生涯を通じて社会学の古典テキストに対する関心を与え続けた彼の古典的名著、Key Problems in Sociological Theory(1964年)へ結実しました。マルクス、デュルケーム、ジンメル、そして特にマックス・ヴェーバーの著作が、ジョンの研究の中心的な位置を占めていました。彼は1981年に、価値と関心のコンフリクトが規範となることを主張したSocial Conflictを刊行し、コンフリクト理論に対する関心をよみがえらせました。彼は権力と強制力が社会でどのように働くかについて理解しており、かつて労働党下院議員に立候補したことはありましたが、積極的に政治活動を行うよりはむしろ、そのような権力の働きについて分析し、説明づけることが社会学者の仕事であると考えていたようです。

1950年代以降に、旧植民地国からイギリスへ移民した人々に対する差別意識と人種差別への彼の深い怒りは、彼の科学への関心と矛盾しませんでした。彼は「人種差別と人種による人権侵害に関するユネスコ国際専門委員会」のメンバーになり、1967年には「いわゆる『人種』関係から生じている諸問題は、生物学的なものよりもむしろ社会的なものである」と明確に主張した声明を出しました。これは、当時としては画期的な考えであったのです。彼は8年間、ISAの「人種・エス

ニック関係に関する委員会」の長を務めていました。1964年にはロバート・ムーアと共にスパークブルック(バーミンガム)で仕事を始め、彼の最も有名な著作となったRace, Community and Conflict (Rex and Moore, 1967年)の刊行につながりました。1974年にハンズワース(バーミンガム)の調査をするために戻り、Colonial Immigrants in a British City: a Class Analysis (Rex and Tomlinson, 1979年)を刊行しています。

ジョンは確固とした視野の持ち主で、議論においては妥協を許さない人物でした。彼はかなり頻繁に、彼と意見が合わなかった数人の同僚を悩ませ、論争相手の考えが表面的なものだということを暴いて楽しんでいました。しかし彼の意見は、本当に愛情から出てきたものだと、常に敬意を払われていました。彼の死後、「ジョンは、私の人生を変えてくれました」という、彼に対する非常に多くのメッセージが、彼の教え子と同僚から届けられました。彼の仕事は、世界中の数多くの人びとに強い影響を与えていたのです。

彼の最後の執筆は、2010年に出版された本の中の、ウィルヘルム・バルダムス(1970年代のバーミンガム大学の社会学教授)に関する章でした。その著書の中で、ジョンは「バルダムスはユニーク人でした[中略]。彼は社会学の理論と実践の流行が移り変わっていくことに賛成していませんでした[中略]。また彼は、友人と同僚に接する時、確固たる信念と勇気を持って彼らを応援する人でした」と書いています。これはジョン自身のことを書いていたのかもしれませんが。ジョンは2010年にイギリス社会学会から「lifetime achievement award」を受賞しており、その死は家族、友人、同僚たちにとって、たいへん惜まれるものであることでしょう。(姫野宏輔訳)■

# > Kurt Jonassohn, 1920-2011

## 訃報 Kurt Jonassohn (1920-2011)

by Céline Saint-Pierre, University of Quebec in Montreal, ISA Executive Secretary,  
1974-1979, and ISA Executive Committee Member, 1986-1990

セイレーヌ・サンピエール(モントリオール ケベック大学、ISA事務局：1974-1979年、ISA実行委員会メンバー：1986-1990年)



Kurt Jonassohn – Stalwart contributor to the ISA.

1974年にKurt Jonassohnと私はISAの事務局長に選出された。Tom Bottomoreはそのときの会長で、事務局はミラノから私が教授をしていたモントリオールのケベック大学に移された。Kurtはコンコルディア大学の社会学の教授だった。われわれは約5年間、一緒に働いた(1974-1979)。そのとき、彼は事務局長としてのポジションをMarcel Rafieとシェアしていた。Marcelも1983年に事務局がアムステルダムに移るまでは、ケベック大学の社会学教授だった。

彼はモントリオールとカナダ全土における英語話者の学術コミュニティの中で重要なポジションを占めていたけれども、フランス語も堪能だった。事務局でのわれわれの日常的な活動は、ほとんどいつもフランス語で行われ、彼はそのことにこだわりを見せていた。ケベックのフランス語文化に対する彼の敏感さは、私は大変立

派だと思うが、大会のコミュニケーションや活動が英語でなされるISAの行事で、フランス語が果たす役割を拡大することにも貢献した。

われわれはどちらも財政的な問題にはあまり関心がなかったが、Kurtは会計係になることを気前よく受け入れた。これは当時、ISAがかなりの低予算で運営されていたことを考えると、簡単な仕事ではない。われわれは増えつつあった個人会員や団体会員から会費を集めていたが、予算は定額のままであり、1974年のトロント大会は赤字となった。Kurtは理事会の他のメンバーとともに、この心許ない状況に立ち向かった。われわれの第1回目の任期(1974-1978)の終わりには、われわれは会費や出版物からの収入など、より多くの予算を獲得するための様々な提案を記載した会計報告を提出した。財政的に楽なときもあれば苦しいときもあったけれども、Kurtは常に率直で、正直で、強い責任感を持っていた。

Kurt Jonassohnはまた、1980年代のISAの雑誌での年代記の刊行を通して、ISAの歴史に関するわれわれの知識に対して重要な貢献を行った。彼が収集した文書や、彼がISAの前任のリーダーたちと行ったインタビューの録音は、1998年にJennifer Plattが出版した『ISA小史：1948-1997』の出発点となった。

事務局長としての任期のあと、Kurtは数年間、ISAとの共同作業を続けた。この期間に、彼は大量虐殺に関する自分の研究について教育し、さらにそれを発展させ続けた。彼はこの分野をリードする人物であり、彼の仕事は1986年に同僚のFrank Chalkとともに「大量虐殺に関するモントリオール研究所」を設立するとき最高潮に達した。こうしたKurtは、1920年8月31日にドイツのケルンに生まれ、2011年12月1日にモントリオールで亡くなったのである。(塩谷芳也 訳) ■

# > Heritage and Rupture in Colombian Sociology

## コロンビア社会学における遺産と断絶

by Patricia S. Jaramillo Guerra with Fernando Cubides, National University of Colombia  
at Bogota  
パトリシア・ジェラミロ・グエラ、フェルナンド・キュビデス(コロンビア国立大学ボゴタ校)



Sociology is a serious business! Young Colombian sociologists attending the National Conference held at Cali, November 2-4, 2011.

2011年11月2～4日、コロンビア社会学会10周年記念のためコロンビア人社会学者はカリ市に集った。テーマは現代コロンビア社会学の遺産と断絶だった。主催校はUniversidad del Valle、ICESL大学、パシフィコ大学の社会学科だった。さらには大会事前にヴェーバー思想を議論する準備集会もまた開かれた。

今大会の成功は、ことに前大会が2006年であったため、我々の学問領域の統合のうえで非常に重要となった。コロンビア社会学の伝統は1950年代に遡るものの、起こるべくして起きた暴力的な状況、そしてゲリラ運動との結びつきを決め付けられて烙印を押されたことなど、障害に苛ま

>>

れ続けてきた。多くの学科が15年もの間閉鎖され、ようやくここ5年から10年のうちに再開されたのである。

内実として、コロンビア社会学は矛盾のあふれる社会のもとで形づくられていることがある。すなわち、暴力が長期安定した民主制と共存し、不平等の水準は南米で最も高い一方で、同時に法体系は南米において稀にみる社会的権利や文化的権利を認めるものとなっている。コロンビアは、社会学に他に類を見ない特別な研究室を備えているだけでなく、社会学が大きな社会的責任を果たすことが求められる状況もある。

ウェーバーに関する大会の集会は、コロンビア国立大学社会学科により主催され、学会大会を主催する大学からも支援を得た。これは、マックス・ヴェーバー思想の解釈における近年の展開を議論する企画であり、しかも著名な国際的な学者によって進行される公開セミナーでもあった。ドイツからはWolfgang Schluchter、メキシコからはFrancisco Gil Villegas Esteban、アルゼンチンからはVernik Javier、スペインからはRodríguez MarínezとJosé Almaraz Pestanaの諸先生が参加して下さった。参加者は、ヴェーバーの著作の再読は、専門家に限らず一般人にとっても重要であると強調していた。現地の社会学者側も国際側の社会学者も述べていたように、古典的な研究者の研究にここまで高度な議論がなされるのは稀であり、とりもなおさずコロンビアの理論的な思考の状況をよく映し出していた。

学会の本大会とは言えば、国際的な発表者がかなりみられた。ISA会長であるカリフォルニア州立大学バークレー校のMichael Burawoy、南米社会学会(ALAS)会長であるブラジルの連邦大学のHenrique Martins、米国プリンストン大学の移民開発センター所長Alejandro Portes、ブエノスアイレス大学からはEmilio Tenti、サンティアゴ(チリ)のカトリック大学からはManuel Antonio Garretónが、そしてチリのキリスト教人文主義学園大学からはMilton Vidal

といった諸先生がいらした。こうした国際的に名を馳せる研究者たちは、学生運動・グローバル社会学・移民・公共社会学・脱植民地主義をめぐる今日的な議論を盛り上げた。

準備に汗を流してくれた方がたのおかげで、これ以上望めないほどの成果が得られた。24個の部会、600人の参加者、200もの論文、海外からの11人のゲスト、さらに「コロンビアにおける社会学部および社会学科ネットワーク(RECFADES)」下の社会学プログラムの15個もの参加に結実したのである。大会の成功は実に明らかであったが、それは「社会学は健在ですね」とか「私たちの学問領域はどの他の学問領域よりも多様で関連し合っています」など閉会で述べられたことにも表れていた。

研究部会の雰囲気もまた、コロンビア社会学の活力を裏付けるものだった。それは、学科や学生数が世界的な減少傾向を跳ね返して増えていることにも示されている。多くの社会学者が、大学の学位取得後に移った先で異なる学問領域を豊かにしたことも顕著であった。その学問領域自体は、主観性に関する新しい観念、ジェンダーに対する因習にとらわれないアプローチ、宗教やその他もろもろに対する斬新なアプローチなど多様であった。かつて顧みられなかった題材も、今はかなり流行りになっている。ファッション・趣向・芸術表現といったレンズを通して見る消費は特にそうである。そしてもちろん、暴力、農民運動、農村共同社会、労働組織といったコロンビア社会学の伝統的な論題もみられた。この分野の関心は今まで以上にますます活発化している。

来客は皆、主催校に最大の賛辞を送った。それは、知的刺激を得られる学会に仕上げたかれらの献身と技術だけでなく、かれらの惜しみのない寛大さや盛大な歓待、そしてサルサの街の例を見ぬ熱気にも向けられていたのである。(佐藤崇子訳) ■

# > Turkic Sociology in a Eurasian Space

## ユーラシア空間におけるトルコ社会学

by Elena Zdravomyslova, European University, St. Petersburg, Russia, and Member of the ISA Executive Committee, 2010-2014

エレナ・ドヴォミスローヴァ(ロシア European University, St. Petersburg, 2010 - 2014年ISA理事会メンバー)



Fourth World Congress of Turkic Sociologists meeting in Ufa, capital of the Republic of Bashkortostan.

2011年9月4-6日、第4回トルコ社会学者世界会議に出席するため、ロシア・西欧諸国・トルコ・カザフスタン・アゼルバイジャン・ウズベキスタン・キルギスタン・タジキスタンから、人文社会科学系の第一級の学者たちがウファに足を運んだ。そのテーマは、「ユーラシア空間—21世紀におけるトルコ語圏諸国およびロシア地域の文明の可能性」であった。この世界会議の第一回目は2005年にトルコで開催され、その後カザ

フキスタン、キルギスタンにて行われてきた。

ウファは、南ウラル地方の美しく人情味のある街で、百万以上の人口を抱えている。ここはバシコルトスタン共和国、すなわちロシア連邦の一自治地域の首都である。また、バシキールという民族集団がロシア人に次いで多くいる多民族的な地域でもある。バシキール語はトルコ語族に属す。バシキール憲法によると二言語が公用語の地位

>>

にあるとされる。すなわち、ロシア語とバシキール語である。しかしながら、バシキール語は都市部では広く使用されず、近年公共の使用機会を広める政治的な取り組みがおこなわれているにもかかわらず、絶滅の危機にあると考えられている。

専門の社会学の意見交換はロシアで行われている。バシキール社会学会は「ロシア社会学者協会(Russian Society of Sociologists)」の団体メンバーであるが、様々な地域や国から200人を超える出席者を迎えた。バシコルトスタン政府も同会議を後援し、助成金のみならず会議を催す補助も提供した。バシコルトスタンの大統領代理は歓迎の挨拶をおこなった。挨拶は重要な象徴的行事であるが、他にもバシキール科学アカデミー(Bashkir Academy of Sciences)の会長、トルコ社会学者協会(the Association of Turkic Sociologists)の理事兼副会長、ロシア社会学者協会の代表の方々、アゼルバイジャンの代表者の方、そしてISAを代表して私自身も挨拶をさせて頂いた。ロシア語とトルコ語が会議の使用言語となった。同時通訳も利用することができた。

総会の論文はユーラシアの空間・文明・共通の歴史・共通の問題と未来とに奉げられた。トルコ社会学者協会の理事 Erkal Mustafaによると、本会議の主な狙いは、異なる文化・社会経済・政治的調整の持続可能な発展および統合を促す多極的なグローバル社会という社会学的な概念化を提示することにあつた。本大会の参加者は、ユーラシア大陸文明の核心にある混成的アイデンティティという(L.Gumilev等の初期のロシア民族学者やその他によって展開された)観念に感銘を受けていた。総会の発表者たちは社会的・歴史的発展に関するトルコのパラダイム、トランスナショナルなアイデンティティを強めていく重要性、トルコ世界のグローバルな統合の検討を重点的におこなった。

論文は、現代ユーラシア主義の理論や実践、トルコ世界とロシアとが抱える実際問題に対する社会科学の関わりに関して述べられていた。会議では次の四つの部会が開かれた。すなわち、「ユーラシア主義——科学的な調査と評価における問題と展望」、「現代ユーラシア空間における社会的動態——問題と解決」、「ユーラシア空間における文化の次元」、「トルコ世界とロシアにおける社会学部」である。『ユーラシア社会学雑誌(The Eurasian Sociological Journal)』を立ち上げることが決まるなど大きな進展も生まれた。

回廊では様々なやり取りが繰り広げられた。例えば、地域や国を越えた連絡先の更新や交換がなされたり、大学間の教員と学生の交換留学の協定が成立されたり、外国の社会学者の繋がりをつくる共同研究や翻訳プロジェクトの機会についての話し合いがおこなわれた。この会議に期待されていた成果のひとつは、バシキール社会学会の象徴的重要性を増進させることにあつた。同学会

は、2012年10月に全ロシア社会学者会議を主催することになっている。

総会において、出席者は様々な企画や決議を出した。その内容は、トルコ語圏諸国にいる社会学者同士の協同研究の円滑化、ロシア人社会学者とトルコ人社会学者間の共同研究の円滑化などである。トルコの大学とウファの大学の代表者は、教授と学生の交換留学制を整える合意に達した。親睦会におけるトルコ系諸国の社会学者同士によるお土産の交換も、専門と文化を通して心を通わせたことが表れていた。

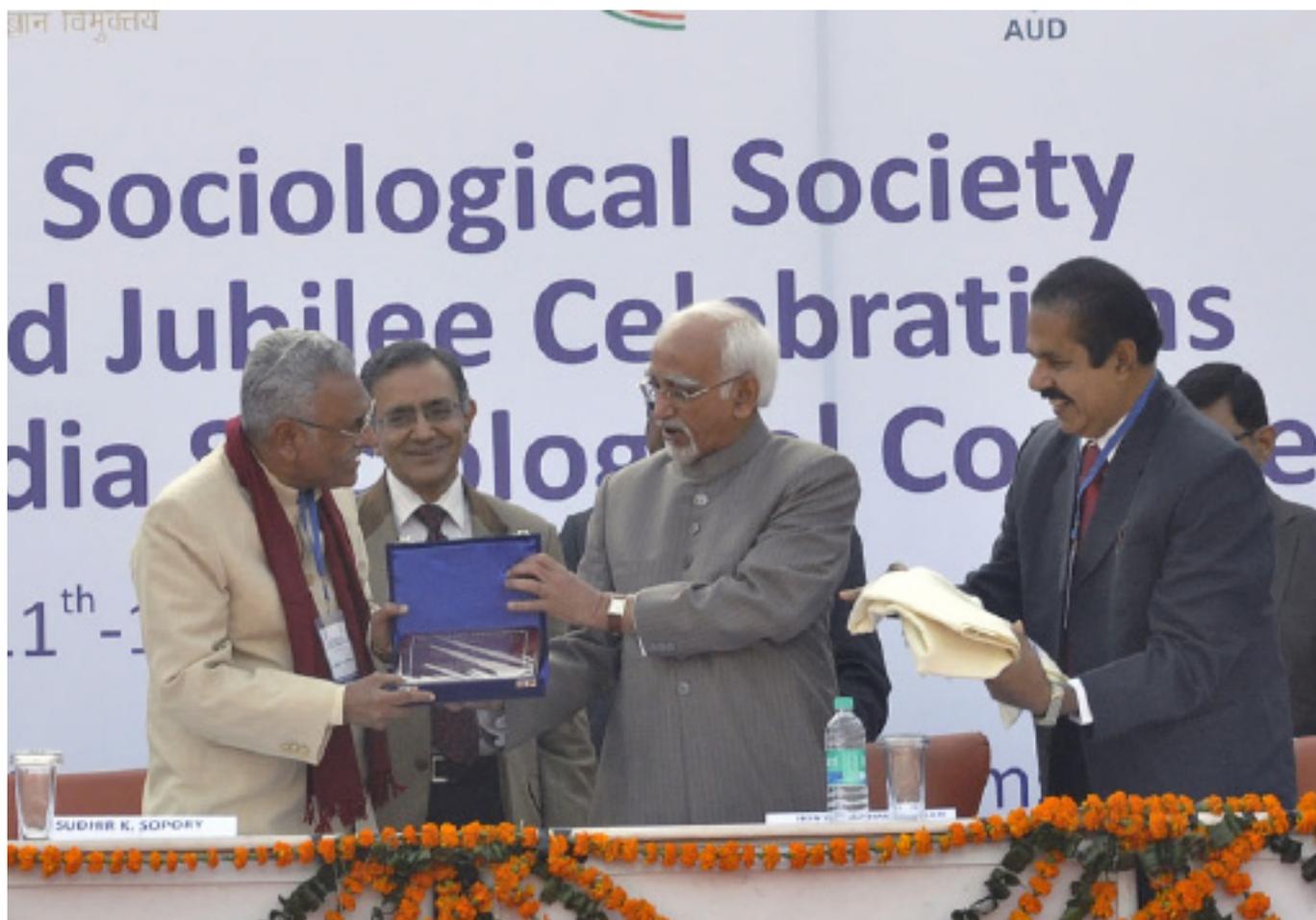
この会議では、バシキールの社会学部の創始者である Nariman Aitov(1925- 1999)の「記念記事」もつくられた。Aitovはソビエト人社会学者の第一世代の一人である。1964年、彼はウファに社会学の研究所を設けた。また、地域振興計画・社会設計に貢献し、社会の流動性と科学技術革命による社会的帰結に関する研究を行った。出版された彼の著作は300を超える。2000年、バシコルトスタン科学アカデミーは卓越した社会学の出版物に与える Aitov賞を設けた。

まとめると、この会議はトルコ語圏国の今後も続く文化的・学術的な統合の証左であり、トランスナショナルな協働と社会学の多様性の承認でもあつた。

当然ながら、トルコ出自の社会学者はこの過程において重要な役割を果たしている。ソ連崩壊後に独立した中央アジア諸国と同様に、北コーカサス地方やロシア東部にも全てそれなりの規模のトルコ語を話す人びとがいる。だが、統合は言語的共通点だけではなく、文明の——ユーラシアという——統一性という共通した考え方にも基づいている。だからこそ、歴史のルーツ、近代化の道、集合的記憶、文化的伝統などが社会統合における理論の供給源として議論されたのだ。主催者側の一人が述べたように、「トルコ語圏諸国は千年の間分断されてきたが、今日こうした国同士の文化的協調や学術的協同の話もできる」までにいたつたのである。(佐藤崇子訳) ■

# > The Indian Sociological Society's Diamond Jubilee インド社会学会60周年記念大会

by T. K. Oommen, Jawaharlal Nehru University, New Delhi, India, Chair of the ISS Organizing Committee, and former ISA President, 1990-1994  
T.K.オーメン(ジャワハール・ネール大学:ニューデリー、インド/インド社会学会組織委員会議長 元ISA会長、1990~1994年)



60周年記念大会が、2011年12月11~13日、ニューデリーのジャワハール・ネール大学(JNU)で開催された。大会は、インドにおける卓越した社会学部であるJNUの社会システム研究センター(CSSS)が主催した。大会運営事務局のアナンド・クマー教授はCSSS所属である。

現在は年1回開かれるインド社会学会(ISS)大会は3層構造を成している。総会(開会講演、最終公演、2つの記念講演)、通常は並列のセ

ッションとして行われるシンポジウム、個々に開催される24の研究部会(RC)である。会議前、会議後のセッションは、主要な会議が開かれる都市とは別の都市で開催される。ここ数年は、若手社会学者の会議も主要会議の直前に開催されている。60周年記念大会の一部として、2つの学会前特別会合が、インドにおいて社会学教育・研究が発祥した2主要拠点であるボンベイとラクナウで開かれた。

60周年記念大会は、学者出身の

Professor T. K. Oommen honored as past President of Indian Sociological Society by Vice-President of India, Shri M. Hamid Ansari. Vice-Chancellor Sudhir Kumar Sopory stands between them, and the present ISS President, Jacob John Kattakayam, looks on from the right.

政治家でインド副大統領のハミッド・アンサリ閣下によって開会が宣言された。彼は、現代世界が直面している危機に取り組む際の社会学の意義を評価し、この文脈から公共社会学のきわだった重要性を指摘した。ISSの現在の会長であるJ.J.カタカヤムは、「インドにおける社会学と社会変化」という会議のテーマを宣告し、主要な討議を開始させた。

開会セッションでは、インドの傑出した社会学者へ荣誉が評されることも毎年の慣例となっている。そのうちの3人、S.K.スリヴァスターヴァ(ベナレス・ヒンドゥー大学)、P.K.B.ナーヤル(ケララ大学)、J.P.S.ウベロイ(デリー大学)には、生涯にわたる業績を讃える賞が授与された。年配者を重んじるインドの伝統に従って、存命の過去のISS会長全員も記念大会の場で荣誉を受けた。

シンポジウムの5つのテーマは、①社会学と社会変容の危機——国際的視野から、②カバナンスの危機、③過激主義の危機、④開発の危機と周縁化の問題、⑤デリーの社会学と社会学であった。1つめのシンポジウムは国際的な趣向をもつものであり、最後のものは地域的な趣向を持ち、残りの3つはインド中心の議題であった。つまり、グローバル—ナショナル—ローカルというひとつながりの範囲がカバーされていた。これらのシンポジウムについてコメントするつもりはないが、世界の読者に向けて書くにあたって、最初のシンポジウムについて少し言及するのが適当だろう。アメリカ、スウェーデン、ドイツ、日本から4人のスピーカーが招かれた。ISA会長のマイケル・ブラヴォイ(アメリカ)は基調演説を行い、

私がシンポジウムの議長を務めた。ブラヴォイ教授は、現在進行形の変容の危機を理解するために、社会運動はその兆候と解決策の両者であるとしてその重要性を強調した。私は社会学の理論と社会的危機と社会・変容の現象との間の切っても切れない結びつきに焦点を当てた。他の3人のスピーカーはそれぞれの国に言及しつつ演説を行なった。

進化するインド社会学の複数の特徴を反映して、2つの記念講演のテーマは、P.N.マクハージー教授による「社会移動と社会構造——概念的・方法的な再構築に向けて」(M.N.スリニヴァス記念講演)とD.N.ダーナガレ教授による「理念型からメタファーへ——革命概念再考」(ラドハカマル・マクハージー記念講演)であり、両者ともISSの元会長である。比較的若い世代の社会学者であるディパンカー・グプタ教授が、「ガバナンスの配分——市民権・成長・開発」という題で最終講演を行なった。

要約集は22の研究部会(RC)で発表された論考の775の要約を載せた。報告申し込みが最も多かったのは2つのRC—「農村・農民・部族共同体」部会と「社会変容と開発」部会、最も少なかったのは「教育と社会、理論」と「概念と方法」の部会であり、おそらくインド社会学の研究関心の現在の流行を指し示している。

60周年記念大会の折に、ISSの公式刊行物である「社会学会報」の特別号において、2つの長文の研究論文が刊行された。ひとつは、A.M.シャーマ教授によるISSの歴史に関する論文であり、もう一つは、現在の編集長

であるN.ジャヤラム教授による「社会学会報」50年の分析に焦点を当てた論文である。加えて、Sage出版社が「社会学会報」の研究論文を7巻もので刊行した。そのうち6つはそれぞれ異なるテーマ、すなわちインド社会学、カーストの変容、農業の変化、周縁の人びと、教育、社会運動を扱っており、7つめは、会長講演の選集である。

全体的に見ると、ISSの60周年記念大会は、約1500人の参加者が参加した記念すべき行事であった。大会に関するこの短い記事が、他のナショナル・アソシエーションに比較の観点から情報を提供できれば幸いである。それはさておき、この行事は、インドの社会学者にとってはるか何マイルもの距離を移動しなければならなかった大会として記憶に残るものであった。(高見具広) ■

# > Social Stratification in the BRIC Countries

## BRICs諸国における社会階層

by Tom Dwyer, University of Campinas, Brazil, and Member of the ISA Executive Committee, 2010-2014  
トム・ドワイヤー(カンピナス大学・ブラジル、ISA理事2010-2014)



Sociologists from Brazil, Russia, India and China assemble in Beijing to discuss social stratification within their countries.

ブラジル、ロシア、インド、そして中国の4カ国からなるBRICs諸国はグローバル秩序における地殻変動として、にわかに目されるようになっている。2011年10月、上記過程とその社会内部の階層化への意味合いを把握していくために、4カ国の社会学者たちが北京の中国社会科学院(CASS)に集まり、李培林編『BRICs諸国における社会階層』(2011)について議論を行った。この論文集は、社会学者たちがBRICs4カ国における結合と分離とをより理解することへの一助になることを目指したものである。

The (この論文集のなかで)BRICsについての独自の定式化として、この4カ国が、広大な国土(300万km<sup>2</sup>以上)と巨大な人口規模(1億5000万人以上)、そして(相対的に)高い成長率で発展している経済からなっていることに言及している。諸論文のなかでは、この3つの要素が、政治的・経済的な生活のみならず知の生産にとっても、経験的に検証可能な諸結果をもたらしていることが示されている。4カ国すべてにおいて、地域間での深刻な不平等が存在している。先進諸国と比べて、相対的に農村部人口が大きく、都市地域内部の不平等よりも農村と都市の間の不平等が大きい。また公務員や政治家は、不釣り合いな富を保有し、急速に成長する「ミドルクラス」の一部となっている。本書のある部門について議論してみると、いくつかの共通する動態がみられた。例をあげると、教育へのアクセスが改善した人口率の上昇にもかかわらず、構造的な不平等が存続し、不平等の

一因となっていることである。さらに、BRICs諸国での経済発展はいずれも、近代化理論が提唱してきた軌跡をたどっておらず、このことは経済・社会発展の諸理論にとって重要な教訓があることを意味している。

多くの共通点が見出されたことにより、セミナー期間中にわたって、われわれの社会階層化のシステムと社会階層化についての(ヨーロッパや北米の)有力な研究や理論化との間にある乖離に対して、途切れることのない考察を行なった。我々は、高い社会移動性の条件下での「生活のための職業」という観念の終焉(とくに市場経済へ移行する中国とロシアで宣告された)と、伝統的な階層化概念との関連性を問い直した。我々は、階層化研究においてAgencyの概念の欠如がいかにアイデンティティ編成と社会変動の説明を困難にしているかを指摘した。BRICs諸国の比較をより有意なものとするために、ナショナルな統計および同一の概念が国ごとにも異なる意味について、より深化した理解をより発展させていく必要性を確認した。BRICs諸国間を隔てる大きな差異を認識しながら、諸国間が互いをよりよく知り合うことで、これらの差異とそれによる社会・政治的活動の異なる類型とがより明確になるはずである。差異の理解と、差異にも関わらず共に生きていく力の発展とが、共通の未来を形成し、避けがたいコンフリクトとを統制していくための鍵となるだろう。これこそが、おそらく他にも増して、社会学的(人類学的)な研究が果たす役割である。(岩館豊訳) ■